

# 川柳塔

昭和四十九年十二月一日発行  
創刊大正十三年 通卷五七一号



No. 571

49年度秀句抄

十二月号

姉妹品大和錦印



# 柔道衣 剣道具

警察庁・警視庁  
全国府県警察  
大阪府警察本部  
講道館・御指定

早川繊維工業株式会社

大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1  
電話(779)1690~2番

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚 焼  
餛 売  
焼餃子  
又焼餛

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば



TEL(641)0551-2



<出張店> なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋  
京阪デパート/堂島地下センター/中之島サン・ストアー/なんば新川店/奈良近鉄百貨店

## こ と し

念も押さずいい事ずくめの聞きかじり

冬の蠅 忘れとおしたわけでなし

うとましく腹たてぬことのむずかしさ

K君結婚

ハネムーン 亡父の墓参の途中下車

若柳流西家元襲名披露

ひきぬきもあでやかに娘道成寺

今年も亦12月がやって来た。そしてやがて来年になる。こうして成長してゆく年輪を徒らにふりかえってばかりはおれない。別に歳の暮れだからといって深刻になる必要もないし、新しい歳を迎えるからといってやたらに昂奮することもあるまい。ただ今日も明日も、今年も来年も、せめて自分を見失なわないだけの意欲を持ち続けたいものと願うだけである。

ことしは「川柳塔」が10周年を迎えた歳である。感銘も深かるうというもの。他人様も

お世辞ぬきではめて下さる程に成長した。私の性格が、どこやらの国の経済成長のような背伸びは絶対に嫌いである故もあって、来年もそのように、おてんと様にお願ひするつもりである。押しつまった12月1日に日本川柳協会が発足した。船でいうたら進水式である。これから艤装を完成し、乗り込んで来る船長、機関長、甲板員たちの若さと熱意が大きく期待される。正しい道を向上してゆく上からも是非成功さししたいと冀うものである。

中 島 生 々 庵

川 柳 塔 十 二 月 号

座右の句

古くとも僕には仁義礼智信

(路 郎)

私の句

運はあるが掴む力は運でなし

長 野 文 庫

# 川柳塔十二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

こ と し

一家三教

中島生々庵……(1)  
西尾 栞……(2)

誹風柳多留廿五篇研究

(4)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮  
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

川柳塔(同人作品)

中島生々庵選……(4)

水煙抄

川村好郎選……(34)

箸供養

東野大八……(24)

秀句鑑賞

(同人吟)

正本水客……(33)

49年度秀句抄

(水煙抄)

浜田久米雄……(41)

選考委員―生々庵・栞・春巢・多久志・好郎・  
小松園・水客・古方・形水・薰風(顧不同)

近作

百人一首と川柳……(6)

富士野鞍馬……(12)

## 一家三教

西 尾 栞

私の住んでいる、八尾の街は、大和と摂津の丁度中間にある。それで昔は、問屋業が発達した。というのは、大和の穀物、米、炭、織物、そういったものを、馬の背にのせて運んでくるが、大阪迄行ってうと、値段は高く売れるが、大阪で宿をとらなければならぬ。即ち宿代と二日の日を費やすびんずなことになる。そこで八尾の町へ御して帰ると、宿賃と一日の日が助かる。そんなわけで、八尾の町は中継所としての問屋が栄えた。それで今でも、問庄、問市、問米、問安などの名の残っている家が店を張っている。その中の問庄さんという家に、この間八十九才のおぼあさんがなくなられた。私は常々この家の主人と懇にしているので早速珠数をもってお通夜に出かけた。通された、通夜の席の正面の一番右の端には、天理教が祀られて左の端、中には、真宗のお東さん、そして左の端には、本門仏立講の黒たんのお仏壇が列んでいる。さて、どれを拝んでいいのやらと思うて、その家の主人に訊ねたところ、あんたの好きなのを拝んでくれたらよろしおまんがな

かちがらす	香川醉々	(44)
きのう・きょう	本多柳志	(45)
ヨーロッパの旅	宮西弥生	(46)
雅号ぶっちゃげばなし	安平次弘道	(51)
大阪文化祭秀句抄	新之助報	(63)
初歩教室	本田恵二郎	(50)
大萬川柳「ひらめき」	川村好郎選	(52)
柳界展望	(庸佑・整理)	(56)
本社十一月句会	林蒼蛇様	(54)
各地柳壇(佳句地10選)	板尾岳人選	(60)
一路集「冬山」	村上春巳選	(48)
「除夜の鐘」	中村ゆきを選	(49)
「人権」	(一三夫・葉子)	(65)
編集後記		

座右の句

君見たまへ 菠稜草が伸びてゐる

私の句

暗闇で靴の個性を探しあて

(路郎)

月原宵明

あとという。私もお通夜に沢山行ったけれど、こんなことは初めてで、読者の方も、きっとそうだろうが、全く変りすぎているので、呆然としていると、実は今日歿くなった母は、天理教だったから、天理教で拝んでくれと言われた。仔細にきくと、お母さんは天理教。この家は代々お東さんの浄土真宗。それにつれそつた奥さんが、本門仏立講という信心をもつておられるので、自分の信ずる宗教を各自が拝んでいて、一寸も差支えない日々を送っているという。之は戦前からそうしているのです、信教の自由などという戦後ではないそうである。

私は今日柳界に於て、伝統、或は本格川柳、革新又は前衛川柳だとか言うて、誌上を賑わしているが、一軒の家で、三つの宗教を各自が信じて、仲よく暮しているのを見ると、柳界もかくありたきものと思つた。折も折、時も時、読売新聞の夕刊に、柳界統一の『日本川柳協会』の記事が載つていて面白く読んだが「六人の大先輩が相ついで、死去したのに伴い、新しい時代を迎え、友好ムードが急速に高まった」という一文は、誰が言うたか知らんが、一言多い一文であつた。

翌日、私は珠数を持たずに、昇天の式に参列して、玉串を奉奠して、静かに御冥福を祈つた。



中島生々庵選

大阪市 河野君子

つつましく秋を装えと萩の花  
満月や嘘持ため日のシルエット

父と旅して

老父の先歩いて亡母の心にはなれず

鎌倉

いざ鎌倉車体を歴史の風が抜け

浅草

中見世で童心ころころ乱舞する

島根県 榎原秀子

思うこと口にせずしている平和

何故今日は母が恋しい長電話

コスモスのこぼなし秋風だけが聞き

所在なさほほぼる飴の甘くなし

ひらり又ひらり落葉にある想い

大阪市 津守柳信

歯車を噛ます努力もして夫婦  
日々好日裏方さんが居て平和

割り切って割り切って往く人使い

松茸を食べたを自慢する子供

又石油上る上ると冬が来る

島根県 堀江正朗

こおろぎが鳴いてトイレへ通せんぼ

眠られず妻居ぬ明日のプラン組む

妻病めば郵便さんの足も減り

僕の目に妻の涙が受話器から

ぶつかれば子の肩にあり鼻の位置

島根県 小砂白汀

シーソーに振り落とされまいとする

軒下へかまきり泣きに来たのかな

人肌へ抱きついてくる秋の蠅

釘を打つとこなき家に核家族

積み上げて見ようかひっくり返えそうか

和歌山市 野村太茂津

鈍刀に見られてもよし鞘払う  
礎となってる鋭角のある鉢

角打てば鋭く欠ける石の性  
磨かれた石の個性を汲んで見る  
石の艶鈍く輝やく石の詩

貝塚市 野坂つき子

ライバルにされているとは気づかない  
早口で喋って恋が匂わない  
試めされているから逆な事も云い  
反応がない女だと誦らめる  
敵愾心深く静かに燃え始め

竹原市 小島蘭幸

ダンブからわざわざ降りて怒らはり  
不足並べてしあわせなのに気がついた  
コンピュータ汗の過程は見てくれず  
給料日前をキャッシュで飲む愉快  
幸福にならずともよし愛哀し

宝塚市 傍島静馬

どたん場の金にエリートらちもなし  
整理したものの切抜き捨てきれず  
新民法さわさりながら親は親  
盗作が入逆してからノイローゼ  
破ったのを破れたと告げて気が重い

岡山県 浜田久米雄

大阪の昼は歩かぬ人ばかり

外遊の友を見送る守り札  
未亡人うろろうると日を過し  
晩酌の量を他人が助言する  
この頭散髪代がまた上り

大阪市 山川阿茶

もてあます金 もてあます命  
男？女？わからずじまいバスを降り  
くたぶれた夏服もいる彼岸すぎ  
御仏壇ただ難題の花赤し  
怖いもの知らずが受けている世相

倉敷市 本田恵二朗

蒔いた種芽が出過ぎても困るなり  
しらふでも踊れるほどにご上達  
余生の小庭に花時計を作る  
人生哲学彫り当てる気の木彫刀  
多島美に夜の部があり月浮べ

岸和田市 高橋操子

あんたとこの味と竝べる塩こんぶ  
ちり鍋の実よりまつたけ高くつき  
母連れて生麩の味も京のもの  
南禅寺家族で座るお茶の味  
娘を叱りながら私に似た気性

高槻市 山田季賛

残り蚊に悩み続ける病むベッド

夏やせの秤の目盛り確かめる

早合点して主治医に叱かられる

病むベッド気楽にしなと主治医言う

ため息をついて今日も病みつづけ

神戸市 仲 どんたく

ワツシヨイワツシヨイ米価ガス代交通費

還暦のまだ紫の色を愛で

ブロンドに染めて連山秋に立つ

拍手するところがわからぬクラシック

フィアンセへ無口の息子の長電話

倉敷市 水 粉 千 翁

つまずいて起きてわが道らしくなり

釣銭を数え直して任される

素うどの音にくらしを聞き惚れる

かあさんもうさんもあるあめのおと

逆立ちになって見直すところばかり

大阪市 本 多 柳 志

激論をなだめる銚子替えに立ち

投書欄僅かな見栄が筆を曲げ

ぬり変えてもう大衆の店でなし

ポストまでの嬉しさ孫の三輪車

風化してまだ石仏は話しかけ

国東半島

大阪市 正 本 水 客

人も仏も国東はみなやさしくて

山の寺星の降る音聞いて寝る

歴史に染まり栗のいが蹴って歩く

磨崖仏乱積みみの石段果てるとこ

老杉の幕切り落して磨崖仏

大阪市 吉 田 圭 井 堂

小犬捨ててなんとか法に引っかけかり

建て増して隣りが急に遠くなり

なぐさめに山高かければとも云えず

年の瀬へまさかが噂のようになり

狂乱の世相 活字が怖くなり

名古屋市 吉 田 水 車

幾重にもこの山里の秋の装

目ざとさも老いのならいと申すべき

亡母の夢何を知らせに来たのやら

顔見世の噂をしつつ障子張り

血圧二二〇に

お医者さんの方が慌てる高血圧

接井市 岩 本 雀 踊 子

堂守が故郷にふれるこぼれ萩

献灯へゆかんで見えた仏さま

まんまるな石に夫婦の名をきざむ  
野心すててすてて西成の昼の酒  
鍵束の一つは秘密の鍵である

豊中市 戸田古方

はしくれに書かれたメモはほっとかれ

人間の知恵が不調和音をまたも出す

三つ子でもわかる理屈が行えず

整理品という仏壇に値をつける

枯渴する日をコンピューターにはじかせる

大阪市 小出智子

秋の夜の湯呑は肌の温みもつ

善悪の鎖の中で明日を組む

妻と云う女で終生名をもたず

母がした通りに亡母の墓洗う

それでなお残る悔なら許される

富田林市 和田維久子

陸奥の旅二句

現実か夢か奥入瀬の紅葉みち

紅葉映え秘話を沈めた湖の色

七色の夢語り合うパパとママ

包まれて包む心を忘れまじ

さりげなく白い眼で見る他人なり

倉敷市 小幡里風

美しく散って苦肉の策とする

曲り角曲って僕もふと迷い

小糠雨ぬれて別れともない別れ

符牒めくある日のパパのメモ手帳

針金へ朝顔がんじがらめ咲き

堺市 河内天笑

玉子割るうまさ独身長かった

少年の持つモノサシは透き通り

メモ帳の義理がだんだん重くなる

先輩の仰言る通り手抜きする

カセットに父ありありと生きている

富田林市 板尾岳人

吊橋を渡ると川が逃げて行く

欲背負い欲捨てに行く山である

うれしくて山の話がしたくなる

冬山へ昨年の雪が寝てしまい

天井の高さを知らぬ山男

尼崎市 黒川紫香

眼がさめて矢張りひとりと云う広さ

くしゃみして男の意地を通しに来

丹後半島

バスで観る松島日本海で溶け

舟屋いま静まりかえる伊根の夜

愛媛県 渡辺 晁 童

牛も馬も村の点景からはずれ

さあ交代と曼珠沙華座をしめる

黒におちつく六十の派手

超過勤務は秋の夜の虫

倉吉市 奥谷 弘 朗

うっかりのようでもツボを心得る

思い出の母校は工場に売られてい

あてにした程に下取り見積らず

冗談で先手を掴んでいる話術

大和郡山市 森田 カズ エ

伸びきった鎖の端で吠える犬

奉職と云うた日もあるチヨーク持つ

ドッグフードもう喰べあきた声で吠え

炎にもたとえた恋のあっけなさ

岸和田市 植山 武 助

連休を待ったに退屈して終り

民宿の朝をお粥にして貰い

幸せの基準を達者に置いて生き

流行がない民謡にある強身

岡山県 永宗 宗 義

消え残る炎へ老の唄が乗る

急坂を止まらぬ石と成って落ち

うるさ型酔わせて幹事飲み直す  
雨の日も百姓じっとして居れず

堺市 高橋 千 万子

何事も順番があり串だんご

おべんちゃら渦を巻いてる酒うまし

嫁もらい五十女が泣きに来る

振り切ったつもり過去の過去が誘いに来

三重県 川上 大 輪

うどん鉢灰皿にしてよく喋り

真ん中で視線がもつれている会議

世渡りに慣れた女の廻り道

幸せへ結納という頭金

堺市 伏見 茂 美

燃えてても女ですもの踏みきれず

心まで老人になれずむごいこと

名古屋旅行

御殿跡さすが広いと思うただけ

歩かねばならぬ矢印明治村

大阪市 西川 誓 二

湯がたぎってるのに足音通り過ぎ

渴いた愛へ家裁水をくれ

娘の学式と其後

誓詞読む二人にあたたかい眼を注ぎ

旅立たせて気を鎮める茶を啜る

青森市 工藤 甲吉

信濃善光寺(二句)

賽コロの上がり振って善光寺

手さぐりの闇戒壇に自我を捨て

満月はこんな街にも冴えわたり

道問えばハタキの先が地図を書き

今治市 越智 一水

夢にまで追いつめられて人生きる  
面白い話正座も苦にならず  
来年の種をこぼして草枯れる  
簞笥ひらけば亡妻は匂うて来

西宮市 高居 百酒

左遷地へ見送りマダム顔も見え

満ち足りた酒は素直に脈に溶け

連休の実家台風の目とはなり

どうせ出す金だ臍くり目を賑むり

高槻市 福田 丁路

祝電の其他多数とあっけなし

マンションで古式豊かに月をめ

半信半疑安物を買ひ

爆弾事件頻発

爆弾を持っていそうな目と出会い

小松市 馬場 魚山

トンネルを抜ければ国庫補助の途

ひまわりが暑くなるぞと朝に咲き

基本身につけた大工の電気鋸

少額はソロバンでするレジスター

大阪市 中川 滋雀

埼玉県立たきたま資料館にて

埴輪の眼夢さまされた恨みこめ

出土品皆まばゆげに光受け

丸墓山古墳

古墳抱き守っているかに堀めぐる

阪東太郎さすがと思う河の中

大阪市 柳原 静香

無縁仏に彼岸花派手に咲き

ふる里で本当の秋見て帰り

捨て猫に今日の孤独を救われる

誕生日老化へ月日容赦なく

松原市 玉置 重人

寿の色が映えてるまるい酒

いつもの道いつもの時間行き帰り

働き蜂家まで待てぬコップ酒

離婚証人

証人の判が泣きたい離婚劇

愛媛県 村上旭童

曼珠沙華日本の秋の色に咲く

嘘ばかり聞いて催促帰って来

御祝儀へいささか無理をしたつもり

そう言えは我家もウーマンリブらしく

呉市 林野甦光

絵にかいた餅あり一人寄り二人寄り

点滴の色秒速で血と交り

ご縁があつて他人を信じ合

非常口気付かずにいた恐ろしさ

大阪市 兎島与呂志

他人様の子供も叱れる母の歳

世話好きの言葉平凡だから皆が寄り

頬つけば見えそうな瞳で俺を追い

いそいそと孫を尋ねる荷をさげて

倉敷市 野田素身郎

話打ち切るチャンス電話のベルが鳴る

坐るだけの役がまわってくるも歳

連休日時計のネジをかけ忘れ  
日曜は妻のタクトに動かされ

守口市 野呂右近

故郷はダムの底さと酌ぎこぼし

雀追う生きた案山子と笑うしわ

燦燦と無償無限の陽の恵み

皆の留守我が手作の塩加減

島根県 錦織文子

秋桜乙女の色を抱いて咲く

遠い子へ秋またひとつひとつ熟れ

つづれさせつづれさせとて秋風の

物価どうあがろうと酌み明かす

樞原市 岩井本蔭棒

寢室へ谷のせせらぎ聞かす宿

退院も近し出前が出入りする

ふとよぎる予感へ下着替えて出る

ぼろくそに言う子の幸を祈る愚よ

仙台市 川村映輝

愚痴を言いながら今年も菊咲かせ

冥土へのお土産できた黝四等

強硬に反対し前後左右見る

太陽は何んにも言わず照らしてる

出雲市 尼緑之助

オイルダラーむっくり地球を見廻した  
病室の雑居も秋の吹きだまり  
もやしで育ちドラマを描いて死ぬ  
人間の悲哀追う身追わるる身

藤井寺市 西 いわを

鳥の声空気が鳴いているようだ  
爪切つて揃えて週休二日制  
掘返す史蹟に今日も水溜る  
歯が痛み冷やしながらの旅行好き

大阪市 西 出一 栄

月 中天にいよいよ冴えて 寂  
一輪の野菊に空虚を埋められる  
稲妻が見抜いた男の肝っ魂  
音痴 結構自分の唄に酔い

門真市 福島 鉄 児

飲む口が汚職の畏へかり立てる  
一杯の酒が人間塗り替える  
酔うたのを屈けるまでの肩を貸し  
テレビ消して寝むられぬ夜と対決す

岡山県 直原 七面 山

ワンマン社長の朝令暮改  
病体を秘め再会の酒を酌む  
台風にあおうと愛の灯は消さず

戸に目張りしてまでクーラー備えつけ

松江市 中川 晃 男

野仏に野菊 すすきの道暮れる

常識が通らず明治を無口にし

番組の切れ目へ箸をとる夕餉

呼びかける かけられる人もない旅路

神戸市 小浜 牧 人

還暦の老いを拒んで背を伸し

あきらめては負けだ九回裏がある

悪役の弱々しさが憎めない

宝石の非運質屋で値踏みされ

竹原市 山内 静 水

探し求めて生きるほかなし

今日も終らん仕事残して

只今と言えば併す妻のいて

小豆煮る匂い愚痴はこぼすまい

香川県 三井 醉 夢

生きざまを月にさらして人を恋い

思いやり足らざりし日の月きびし

物価高ふれず観月会終る

花嫁の挨拶マイクおどろいた

利用価値ある間だけまつりあげ  
守口市 村田 瓢 太

生の脆さ親友の急死に訓えられ

コマーシャルに惚れこむ程の味でなし  
お互の我が張りが張り合っている職場

大阪市 金井文秋

六十路まだ親馬鹿が治らない

あがつてる証、笑いへ間が置けず

動いてはせぬかと憂おちつけず

世に男あるから寡婦にある迷い

伊丹市 小川静観堂

ジャワ小川部隊戦友会同

絶景かな絶景かな老兵と姥ざくら

葦山の富士見が雨で土産買う

枯枝の波柿一つ日本の秋

亡き妻の遺影を抱いて寝た夜かな

兵庫県 河原みゆる

結婚と葬式二度ほめられた

孫娘独身趣味をふりかざし

一トつ二たつ仏戒破って今日も生き

再軍備しなやとノーベル釘を刺し

竹原市 三宅不朽

恋育つ片肺どうしの花を生け

絵本より母の掌を恋う幼子等の熱

病棟のどの灯も秋をしらく病み

足の裏にも虫の声きく朝の試歩

八尾市 大路美幸

貯金する僕は予言を信じない

靴をはく夫に渡すヘルメット

亡母にだけ嘘のつけない僕である

合格を夢見て机に眠りこけ

兵庫県 遠山可住

虎兇を得る虎穴白紙の靴を脱ぎ

マイクのない時のタレント小そう見え

水に流す首は振れない女です

秋うたう虫へ灯りを消してやる

倉敷市 藤井春日

信任のかけで悪心芽吹き初め

四季の花心の友として余生

安定剤飲んで切り抜く十二月

不渡りの手形貰うて有難う

大田市 藤田軒太楼

秋を着てすつくと立った菊人形

子の招き嬉し旅立つ天高し

句想練る疲れへ菊の語りかけ

ほっときなそろそろ腹も減る頃さ

松江市 岡崎祥月

十周年記念表彰をうけて

年輪四十八年実を結ぶ感激

夜の国道長男の腕にぶらない

一本に進んで取り柄ない男

愛一と筋に興味一と筋に共に老い

水見市 関 美子

ものぐさも秋を漬け込み冬支度

不特定多数の一人暮の駅

父の貨車兄妹が押す冬の坂

憧れも夢も抱かず風化する

尼崎市 高津 徹也

耐えているその瞳その胸その女

剃り跡をなでて余裕の菊日和

帯の柄せめて予算のある限り

愉快じゃないか金で買えない年齢とし

大阪市 室 谷 徹 舟

駄馬の儘定年が来た芽出度さよ

定年へ妻の伴奏あればこそ

定年へ最後の給料受領印

定年の乾盃だからぐっと来る

東大阪市 竹 中 肖 二

仏像を丸い心になって撫で

いらだって行けば信号赤ばかり

この辺にポストが欲しいニュータウン

甘酒に京を味わう九年坂

東京都 山 根 白 星

泳がせて置けば世迷いごとを言う

ありがたや母の手紙の余白読む

世の中の四捨か五人のところに居る

三面に美談がのった日の和み

守口市 羽 原 静 歩

末法の御代も読経の静かなり

肉眼を持たぬ案山子になっていた

拭くほどに北山杉のあたたかし

住みにくい地球へ拳こぶしあたたためる

松江市 柳 楽 鶴 丸

妻の若さに困ったとは云えず

死 最高に美しく仕上げたい

微笑みをかくす悪妻の仮面つけ

ごめんネと云われて朝寝を叱られず

香川県 岡 田 拳 法

裏切られてからは命令遠く聞く

公平に分けろとなまけものが言う

裏の裏知ってて直線しか引けず

たてまえで攻合い痛み分けとなり

東大阪市 久 米 奈 良 子

一もとの萩に詩情を誘われる

いたわりは隠れた傷にしみわたる  
学びとる心くらしの智恵満てり

徳島日帰り墓参

ゆくゆくは阿波の土なる経を誦げ

八尾市 香川 醉々

臼杵石仏群

石仏に幾春秋の朱が残る

石仏の目をつむらせる秋の風

首の座になおり石仏まなこ閉す

三尊を護る不動の石の劔

岡山県 出原 敬一

面会謝絶いま人世の岐路にたつ

ご不幸がつづき昨日の花が売れ

喪の妻子涙だけでは生きられず

母子家庭裏へ佗しいものを干し

八尾市 高橋 夕花

秋肌へ母のすすめる糠袋

書道展読めない文字を書かされる

人形の乱れを知らぬ不倅せ

人想うことすら罪と説き給う

島根県 堀江 芳子

夫と掌を重ねて生命確かめる  
いちにちの心洗うて日記閉す

優しさがいっそ佗しい絆かな

ここからは押しくらまんじゅう癒える日よ

京都市 松川 杜的

乳のみ児の声がしそうに稚児地蔵

おきまりの文句でガイド別れ云う

鎌倉を歩く

化粧坂コスモスに歴史ゆれ動く

老残の古寺サルビアの赤がよし

竹原市 森井 善居

愛憎の渦を逃がれて月が冴え

万年青趣味いいわね 見てはくれはらず

非番日の暇へパチンコ定休日

正座して抹茶ほんとの味となる

大阪市 阪上 十止庵

台風の日も朝顔は咲くつもり

信じればその細い手もたくましく

彩のない暮しで寡婦の城守る

ときすでにおそし養生訓伏せる

松江市 吉岡 遙児

郵便遅配会は一昨日済んでいた

片手落ち週休二日に足らぬもの

別に愛確かめもせず初老ふと

やはりそうだったかと遺書読んでから

松江市 小林 孤呂 二

朝の茶は動への意欲をもつものよ

持たぬ者の悩みプランどおりに成らず

相傘が去くバスタアミナルは雨

家の歪みへ障子の骨は逆らわず

大阪市 江城 修 史

斗病の道草せめて子に賭ける

気疲れの夫婦溜息抱いて寝る

心の灯消して不況の風が吹く

黄昏れの疲れつのらす待ち呆け

倉敷市 稲田 豊 作

長旅へ老人櫛の苗を植え

嚮宴に潰瘍の胃が怖気づき

六三三四それから娘は嫁支度

亡き妻へ

ハレルヤは怒濤に耐えた妻のもの

岸和田市 深川 みきを

知りながらないへソクリをねだる妻

銀婚もまじかになって妻が見え

名月を彩る尾花が見つからず

控えめにすすめてくれる破格品

新宮市 大矢 十郎

男の証し電気カミソリうなり出す

父母小さく小さく六十五年添い  
大阪へ済まぬが春の京都奈良

玉野市 小谷 仙山

さりげなく別れて燃える曼珠沙華

定年へ男一匹小そう生き

流行を着てさっそうと古都の旅

大阪市 宮尾 あいき

嫁庇う子いじらしとも淋しとも

三回忌亡夫名宛の女文字

人並に孫抱いてゆく中山寺

岸和田市 福浦 勝晴

十二月どこかで太鼓の乱れ打ち

感情の崖を跣足で駆けまわる

藍色の暖簾にしみるささめ雪

笠岡市 出原 真奇

お隣りの借景入れて庭が出来

血統の正しさ孫も大駟

孫も寝てコオロギ間近で鳴いてくれ

大阪市 今西 章雅

老いの坂信号青を確認し

猫でなく小判が効いただるまの眼

十円をアリバイ料に赤電話

鳥取市 両川 洋々

示談屋が命に値段つけて去に

命綱信じて挑む海が荒れ

顔たててやれば二度目も来て甘え

竹原市 時 広 一 路

あと一歩あるから心決まらない

道端の地藏に嬉し四季の花

明日の日がわからないのが救いかも

和泉市 西 岡 洛 醉

ぬけ殻の月見つけたり昼下り

一握の僕にも今日あり明日があり

一億の一と粒つつがなく生きる

島根県 大 森 孝 華

病む窓へ詩をせかれてあかね雲

ありし日を知らせるように彼岸花

秋の風肌に感じて旅ひとり

笠岡市 松 本 忠 三

逃げ腰へ聞いてますかと妻の語気

さえずりを残し女子学生が下車

寝たきりの父へ値上げを伏せておき

大阪市 黒 田 真 砂

自説曲げず心で侘びて居る夕餉

友の訃

菊大輪散りて侘しい秋の暮れ

笑顔今消えて白菊の香に送る

下関市 国 弘 半 休 門

贈義姉喜寿一句

スロースロー越えてほほえむ喜寿の峠

火の元を確めさせてテレビやむ

無理解が「むつ」一隻を持てあまし

岡山県 嘉 数 千 代 香

倅せは天高うして腹が減り

狂乱物価木馬動いているばかり

ストつづく地球も止ってみたいだろ

高槻市 若 柳 潮 花

俗名で妻の知らない終末書く

京の秋茶そばの上の車えび

竹さわぐ音して嵯峨は時雨かけ

鳥取県 河 村 日 満

伊豆下田にて

ふたりだけの客観光バス中止され

連れてきてよかった妻と見る下田

平和賞が佐藤元首相に贈られて

一億の度胆をぬいた平和賞

鳥取県 清 水 一 保

そつとペン置いて虫の音聞きほれる

台風が他県に外れて喜べず

台風にも政治にも耐え稲稔り

大阪市 河井庸佑

摘み捨てて生活を守る蜜柑畑  
農夫の詩浅漬を噛む歯音から

神戸市 中村ゆきをを

その昔しので通る山辺の道  
当然のように借金頼みこむ

冷たさが友情だったとわかりかけ

大阪市 天正千梢

咲くこと祈って種まく寂しい日  
法学部出て総会屋に教えられ  
気まじめに昭和一ヶタ家背負う

岸和田市 葛城伊三郎

年金をもらい白粉のらぬ肌

しあわせ者よ負け方知って居り

話相手が機械になってガムをかみ

奈良市 宮口笛生

一と節の竹にも笛の心あり  
こおろぎの哀れを見たり霜の朝  
何もかもいびつに見てる社会の眼

今治市 原田一風

酒うまくなりて候秋深む

満足の顔が出来たか鏡閉ず

づ抜けてる処もなくいい妻で

出雲市 原 独仙

旅好きの野に寝山に寝駅で寝る  
岩角を曲ると流が真正面  
同級会儲けてるのが置いて去に

米子市 林 瑞枝

窓の中出て受付けのご親切  
適齡の娘抱えて秋深む

夜逃げしたこともあったと廻り椅子

美祿市 安平次弘道

義姉 北里病院にて癌で逝く  
百万遍唱えた数珠を娘に残し  
悲しい時こそ笑おうとする涙  
安らかな死顔に信仰の甲斐を知る

八尾市 宮西弥生

新しい農具実りが待ちどおし

浮気の血先祖と同じ苦勞する

真似てるなとデモへ蟻のひとりごと

平田市 久家代仕男

口きかぬ日もあり女武器磨く  
あるときは聖母のままで酔わぬ肚  
背を向けて子なき夫婦の夜が長い

百歳の微笑仕合わせ皺にとけ

兵庫縣 大江秋月

五箇山のここにも過疎のいろり端

岡山縣 竹内翁童

個性ひん曲げて盆栽つくられる  
とても手が出ないが値段だけは見る  
宿直の部屋へ野良猫顔を出し

人間のおごり天災は見のがさず  
都会の喧燥気弱をせめたてる  
残照の命集める彼岸花

大阪府 川口弘生

東大阪府 落合思月

オカエビの甘露煮で酌む飛驒の酒  
まんなかが歪み勝ちです栗三つ子  
旅に病んで御堂の庭に憩う句碑

七色の虹はあなたにかけける夢  
独立へ金主の一と言壁となり  
米をとぐ妻にみじんもない野心

宇部市 平田実男

呉市 榎田英詩

負け惜しみ言うから余計小さく見え  
初恋に出合い年甲斐ない動悸  
ドラマのように臨終いったらなと思ひ

指洩れる砂抵抗の無駄を知り  
生命線ここで止った運不運  
赤い灯がボンツン滞在さんおひま

鳥取縣 森田布堂

京都市 都倉求芽

裸でも貫録のある面構え  
いつまでも生きているよな身のまわり  
お婆ちゃんのお次ぎ胃カメラ俺が飲み

雲海の広さへ紅葉の鳥いくつ  
栗駒は仕立おろしの裾模様  
栗駒を染めてきた風窓を打つ

岡山縣 池田古心

大阪府 飛田好一

善の貌作って賽銭ケチ臭し  
高野から戻って疲れが床に伏し  
葉代もういりません齢になり

反省へ独り酌んでる苦しい酒  
酒やめた夫へ妻の薄化粧  
朝のビル掃除器のように人を吸い

泉大津市 村上春巳

松山市 谷のぶお

斑鳩の名句へ若者ガムを噛み  
合掌の群落墓場のように暮れ

二人でつめて話せば弱音吐く  
サラーマンレジャーレジャーと狙われる  
気遣うてくれるが助けてはくれず

宿毛市 瀬田美知

吊皮の六十キロをもてあまし  
あっさりのれんすてれば心軽かろう  
強風下支え木やりたい稲は出穂

大阪市 鈴木生仏

おとなしく待ったコタツは又だかれ  
人間の顔にも春と秋がある  
菊人形顔に似合の花の色

諫早市 原田明春

心配になったか保険屋見舞に来  
文明え餅焼く時の火をさがし  
云訳も考えてから梯子酒

神戸市 佐々木静泉

秋風になびくすすきのす直すぎ  
野辺おくりいつかわたしも通るとこ  
天気予報あしたへ虹の橋をかけ

大洲市 堀内暁風

忠告へ疑心暗鬼の天の邪鬼  
金だけがいちケチケチする男  
骨董へ魅力持つほど金が出る

茨木市 吉川米子  
栗園で置いてる栗を拾わされ  
手古ずらす人ほど気になる世話役さん  
賞もろたら以前のもも見直され

岸和田市 林裕子

ツルハシに汗がとびちる道ぶしん  
白魚の指でいきてるイミテーション  
指先にあやつられてる計算機

具塚市 行天千代

四面楚歌おみくじまでが凶と出る  
ダイヤルだけ廻してお話し出来ぬ孫  
埋れ火を起しただけで去った人

香川県 岩田ひさお

虫の詩消さぬ程度に秋の雨  
青空をみあげみの虫蓋を閉す

甥に男子誕生

母乳出ぬママ一心に児を見つめ

和歌山市 沢山福水

霧はれて山には山の灯がともり  
目出度くもない転勤へ祝い酒  
逆境にいのちを賭けた文学碑

富田林市 岩田美代

弱さかな秋いっばいのひとり言

完璧のポーズを着けて動けない

姫路市 梅谿庵不酔

酒くせが着任よりも先に着き

忘れたと言えば年じゃと見下げられ

八尾市 古川鶴声

たくましい腕に縋って見る悪夢

頑張りを知らぬ世相にもたれ合い

青森県 木村涼人

飲む金の苦面上手な怠け者

若者にバット洋モクかと聞かれ

西宮市 藤村メ女

豊かさは余生を趣味と明け暮れる

団地静かに冬の夕陽が落ちてゆき

枚方市 宮川珠笑

優勝旗受ける練習してなんだ

待合の空気乱しに救急車

倉吉市 渡辺菩句

御無沙汰を病気のせいにしてわびる

虹の街それから鰻食べさせる

米子市 増田竹馬

初声は家門を確と背負う声

前歯二本生えたと長距離はずむ声

鳥取県 鈴木村諷子

この墓標わたしが立てた文字たしか  
大阪の客のうらやむ郷に住み

東大阪市 斎藤三十四

物価高やりくり主婦の声あつめ

物価高またまたストの秋となる

羽曳野市 塩満敏

隆起したバストを武器に身構える

流行に伸縮自在の脚線美

大阪市 藤田頂留子

立ち話つるべ落しにちとあわて

漁師今朝海の機嫌にのびをする

大阪市 神田秀峰

連休の前後満員医者の特

ウーマンリブ男の三步先を行き

大阪市 不二田一三夫

昔の女の語が出た 津く斬きで死んだそな

ニュートンとウイリアム・テルが見た林檎

川村好郎

誕生日これまでのことこれからのこと

人通る通らぬときも散る紅葉

これしきのことにも涙老いしかな

あの人も変り嵯峨野路も変り

プラカード着ぶくれていて寒かろう

西尾 榮

モナ・リザの横目口元いけずめき  
或日突然海恋しくて恋しくて

磨き上がるまでの工程をきく値札  
ろうけつ染ののれん女主人の声やよし  
舌出した嘘げんこつの真似ですみ

菊沢小松園

泣き止んであたりの銭を掻きあつめ  
何を護るつもりで女しゃがむのか

欺まされているのも愛というものか  
金種の癖を知ってて釘歪む  
切ッ先きの角度がこちら向いてくる

若本多久志

徹底が過ぎて寂しき味気なさ  
世渡りが巧み円満な人という  
利用して生き利用されて生き

年寄りを敬語で責めて黙らせる  
ロッカーへ捨てて社会が悪いのよ

作

今治市 月原宵明

共鳴のまなこ目たたき一つせず  
コスモスがいつそ遺影を悲しませ  
狂暴をじっと押えたダムの貌  
愛の巢はパンに追われて夢がない

大洲市 米沢 曉明

銭湯のこも原発賛否論  
忠告に来て叱られに来たような  
よく見れば竹馬の友だ八重州口

岐阜市 市川 鱗魚

歟のたこ笑えば笑うだけの父  
秋の酒なぜか話がしたくなり

セールの初心くずれて来る喫茶  
幸がみえる二人で家具売場

東京都 池口 呑歩

枯葉舞い日記にそれつきりの愛  
演技する愛に流れて行く枯葉  
悲しみの底の底から枯葉舞う

今治市 長野 文庫

マイクずれやや失礼な口をきき  
火花しか出ぬライターに腹を立て  
急行が蹴散らしてゆく無人駅  
揚足をとる気数字のメモを持ち  
母親に辞書を繰らせる子のテスト

近

俳風柳多留廿五篇研究

一(四)一



岡田 甫  
(近世庶民文化研究所・主宰)

青木迷朗・室山三柳・八木敬一  
西原亮・入江勇・紀内恒久  
鈴木黄・清博・美岡田甫

62 川留にこりて寢覚のそはもくひ

青木「川留」は大井・天竜等の大川が、大雨などのため増水して川越しが止まる事。「寢覚の蕎麦」は、田中仙道の寢覚の立場で売られていた名物の蕎麦。往路東海道で川留にあつて懲りて、帰路は仲仙道を通り、名物の蕎麦を喰べて見たというのである。

寢覚の里の蚊いぶしに蕎麦の殻 七二・9  
寢覚の蕎麦を夢で喰ふ旅被れ 八四・11  
岡田一贊

63 ずぶ六の客へ鍛鎌素湯で出し

青木「鍛鎌」はつきりしないが、酒の酔いをさます薬らしい。二日酔の客へ酔覚ましの妙薬(万能薬の類か)に白湯を添えて出したというのであろう。

室山「鍛鎌」が知りたい。なお「二日酔」とあるのは、やはり「泥酔」とすべきであろう。入江「老大家がかねて軽視される『辞堂』下

六四七頁に「みつだうぐ」(三道具)の項があり、「鯛の三ツ道具の略称。鯛の頭部には三箇の骨の形のそれぞれ鋤、鍛、鎌に似たものがある。それを云ふのである」とある。

酔をさますのに、鯛の頭をさ湯に入れて飲むむ法があつたとすれば、この「鍛鎌」はまさびびたりだが。当地では食後たべた赤魚の頭を箸の先で砕いて、茶(または素湯)を注いで飲む風習がある。私も戦前これをやらされた記憶がある。母の言では、頭には脳みそがあり、滋養があるからとの講釈であつた。清「入江氏のおっしゃる鍛鎌、何か文献が出れば明解となるのだが。」

八木「鍛鎌は入江氏ご明解で、『川柳見世物の骨の吸物みたいな水煮を食べますが、あれでしよう。酔醒にはさっぱりしていいでしょう。また、悪酔いの薬というような俗信があつたのかも知れません。」

岡田「鍛鎌を白湯で喰はせて一分づめ」(二二・31)の類句からすると、入江説の

鯛の三道具、また泥酔客を一ぱい喰わせるあくだい商法か。

64 江戸の馬田舎芝居でつがもねゑ

青木「江戸の馬」は江戸下りの馬の脚。「つがもねゑ」は、訳も無い。または馬鹿々々しいという意の語。市川團十郎が例の市川荒事の場合の常套語であつた。

江戸下りの馬の脚にとつては、不完全な設備の田舎での興行は、桧舞台と違つて舞台装置、大道具、小道具も揃っていないので、はなはしない見せ場がないから、馬鹿々々しいというのであろう。本来の馬の脚の役ども、こども取れるが、後者であらう。

江戸の馬田舎芝居で人に成 四五・25  
江戸の馬田舎ではねた役廻り 七二・34  
西原「引用句(四五・25)のように人になつた。しかも団十郎ばかりで「つがもねゑ」を連発しているおかしさ。

室山「右に贊。連発とまで行かなくても、ふ

んぞりかえっているのであろう。何しろ江戸の役者なのだから……。

入江―室山氏説に賛。田舎芝居では「一つがもねえ」などと、助六役をやる格差のひき起すおかしみ。

岡田―江戸の芝居では馬の脚のベエベエ役者が、ドサ廻りの芝居では一座の大立物。

65 ひつつかいたのか名代の申わけ

青木―「川柳吉原風俗絵図」に収められていて、「下卑客の挑戦に対して拒絶した証拠、これは姉女郎に対する義理立てとなる」とあり、これで尽されいると思う。

「名代」とは、馴染客ががち合った場合、一人の客にはその遊女がお相手をするが、他の客にはそれぞれ妹分の新造を出すというのが廓内の慣習である。この傾城の代理として出された妹分の新造を名代という。しかも、この名代が出た場合、揚代は格別値下げするわけではなく、その上、この名代には手も足も出せないという不文律があるので、しばしば悶着も生じた。

名代へうつぶんをいふけちな奴 一三・35  
名代を口説いてごぶをさらず也 安九・原3

やぶれかぶれで名代をおつかじめ 三五・11  
室山―賛。礎稿のご説明もさることながら、わたしは「新造もやっぱり人の子」ともみた

い。  
八木―ねむってしまったのではなからうか。途中で目をさまし引つかいたが、時すでにおそし。本件は既遂事件である。

岡田―八木説の既遂事件説に賛。

66 どたばたを見れハかつほと猫と下女

青木―猫が鑿をくわえ、その泥棒猫を下女が追っ駆けているという景。どたばたが何であらうと振り返って見ると、以上のよう知れたら。傍観者にとってはおかしきかも知れぬが、下女は真剣。おかしさを呼ぼうとしての作句かも知れないが大して面白くもない。

室山―賛。三題断。もつともこれは文化元年六月、三笑亭可楽が下谷広徳寺門前の孔雀茶屋ではじめたらしいから、この句より後のことである。  
入江―賛。  
初かつほといやつだと猫を追ひ 六・10  
岡田―同。

67 さはげたおちき勞がいをかたづける

青木―世情にたけた伯父さんが、氣鬱症でぶらぶらしている娘やその両親に「早く縁付けせよ、そうすれば病氣なんか一べんにすつ飛んでしまふ。そうすれば家の中も明るくなる」というのであり、おじきは恋の病であるう事お見透しである。

勞咳へ一かばちかの婿をとり 安八・喜2  
むこの取りようがおそいと名医言い

室山―賛。やはり息子の勞咳であらう。〔再考〕「かたづける」の語から、やはり娘か。  
入江―礎稿に賛。娘の勞咳。  
清―娘に賛。

岡田―同。

68 宿下り道をきくうち葉をちぎり

青木―土地不案内の者に道を聞かれています宿下りの娘。聞かれています間、葉っぱをちぎっているという状態。「葉をちぎり」が成長期にある娘の如何にもおんな女して来た姿感しぐさを彷彿させ面白い句である。

西原―宿下りが人がにたずねているのである。親類まわりである。

室山―「道をきく」のは宿下りの供であらう。その間に「葉をちぎる」のである。外へ久々に出ていることと、じろじろ見られるのが恥かしくいやであることが、こいつった仕草になるのであらう。

入江―どちらにもとれるが、室山氏説に賛。八木―いろいろにとれるが、西原氏説がすなおのよう。私もそう考えていました。ただ、自分の家、或は親類の家への道を聞くのは少し変である。宿下りは年二回ではなく、二、三年に一回なので、町の様子が少々変って、道がよく判らなくなつたというのである。少々現代の過ぎるが。葉をちぎり、にはじらいを含んだ宿下りらしい姿態が偲げられる。

紀内―いまひとつ状況がはっきりしない。

岡田―室山説に賛。江戸は広い。むかしは娘時代に滅多に外出せず、外出しても一人歩きをしないから、自家への道が自分でも分からず、供の者が「横山町へはどういけばいいんですか」などと聞きながら行くのである。



り出す箸は杉が材料で、どうやら客膳用に仕上げたものらしい。割箸は作っても出足は早い材料が嵩めるから—というのが理由。現在、日本の割箸用の木材は一日に貨車二百輛とかきいたが、いわば敗戦の往時とて大変な消耗率だったにちがいない。割ばしの材質は産地によって異なるが、北海道のスギ、エゾマツ、トドマツが主力で、一番モノがいいのは奈良で、酒樽の余材の吉野スギが最高級品。

「同じ材料と手間をかけるなら、やはり上代の張るものがいいので、うちはまさ目の通った利久スギでがん張ってる」

いまでいう付加価値の高い製品で生産性をあげているところらしい。もっとも、可州さんは程なく、戦後の経済事情の好転回復によって、本職である待望の呉服屋渡世にすぐさま還つたらしいが、そのころはこちらも大洲を離れて、他の地での新聞編集屋だ。その後久しぶりにあって、互いの飯のタネの話になるとよく箸の話が話題になる。

「箸は二本、ペンは一本衆寡敵せず」

などと私がいうと、可州さんはいわく、「赤スジの通つた利久スギは、一度水にぬらして膳にそえる。ちょうど私みたようなものでして、箸は膳に絶対乗せる物ではないんです。これは客の接待用のタウーです」

箸は中国から渡来したらしい。三国志の主人公魏の曹操が、客分の蜀の玄德と野亭で食

事をしているとき、「いまの天下を左右できる大人物はわしと貴公の二人だけだ」といったので玄德は、わが心をすずに曹操に見破られたかと驚愕して思わず持った箸をとり落す。それを見とがめた曹操だが、折から鳴りひびく雷にことよせ「拙者は雷が大嫌い」とうまく逃げた玄德に、曹操はこの男雷ごときに憐いて、と蔑するの心を抱き、まんまと玄德の策にはまるという一幕がある。

日本ではスサノオノ命が、出雲の川辺で箸の流れるのをみて上流に都邑ありと判断危難を脱れた一節もある。日本の太古の箸は、上部がつながつたピンセット様式のものであつたらしい。それがやがて二本一對の細い棒状となり材質もスギ、ヒノキ、タケ、ヤナギ、クワ、ハギ、ナンテン、クロモジとなる。中国では象牙、角、骨、金属だがこのあたりになると東南アジア各域にわたっていく。忘れられないのは軍隊のカネの箸だが、当節の軍隊ならさしずめハシも茶碗も合成樹脂オンリーだろう。軍隊といえは、いろんな職種の腕のいいところが補充兵で、よんどころなくパチンコ屋の裏回りみたいな若僧の現役兵の下風にさらされはじめられていたが、一人の老兵など、江戸前の板場のチャキチャキで衛兵所の「飯あげ」どきに、年期の入つた箸だんきをきいたことがある。

正月、節供、誕生祝い、食ぞめなどはヤナ

ギの祝箸が使われます。へえ、上等兵殿は川柳家で、そんなら川柳祝事はヤナギの箸をお使いなさんせ、風流箸に通じて一しおの慶事でやす、とイキなことをいっていたものだ。

「むかしのサムライは馬場に出るとき、めしは握り飯にするんです、なぜなら箸が使用中折れると必ず落馬するというコトワザからです。だからこんなときは包丁式の箸にした殿様がいたそうですね、だつてこの式に使う箸は金具付ですから」

箸を新しくしよう。孫悟空なみに世界を飛び回るキツシンジャーや、大統領をクビになつたニクソンは、箸が出るときげんナメだったそうだ。そこでゴマスリが、箸は不潔だとコキ下ろした由。それをきいて私は、アメリカ建国の陰にはインデアンと煙管の回し飲みをやつた勇氣？のある開拓者がいたことを想起した。アメリカ切つての中国通のジャナリーリスト、オーエン・ラチモアは、箸を使って飯の食えないようなアメリカ人は、中国を語る資格はないと喝破しているから、箸にも棒にもかからぬ国際政治が根を生やすのである。

柳友可州さんの枕元で、以上こんな箸だんぎを走馬燈にした私だが、こうした想念こそ、線香にまさる故人の箸供養ともとにかく思ったことである。

# 49年度



## (同人の部)

漢考委員

中島生々庵 菊沢小松園  
 川村好郎 正本水客  
 西尾 栗 戸田古方  
 北川春巢 大坂形水  
 若本多久志 橘高薰風

(願不同)

倉敷市 藤井春日  
 檐山へ背負うて呉れる子もおらず

高根県 堀江正朗  
 冬になる音 雨になり雪になり

倉敷市 本田恵二郎  
 一と粒の種太陽は見逃がさず

大阪府 福井野迷路  
 膝坊主 飽列敷いてお茶の席

大阪府 正本水客  
 石だたみの余韻 歴史が通り過ぎ  
 大阪府 橘高薰風

藤井寺市 西いわを  
 遠くより塔は祈りの如く見え  
 和歌山市 野村太茂津  
 出る杭になろうと土台蹴って見る

大阪府 橘高薰風  
 昼の月瓢湖に映る力なし

松原市 谷垣史好  
 年の瀬に身を置きたくて街に出る

青森市 工藤甲吉  
 雲は挽歌 雲は新生 恩師の忌  
 ステテコで我天皇を羨まず

大阪府 小出智子  
 中年や父に優しくなろうとす  
 泉大津市 村上春巳

松茸も食わずうかうか秋がすぎ

美称市 安平次弘道

よちよちと追えばよちよち鳩も逃げ

大阪市 室谷徹舟

誰にでも似ている顔で孫生まれ

和歌山市 野村太茂津

会者常離出遇いのあとの悟りとも

富田林市 岩田美代

木枯しも云い分あつての鳴咽たり

倉敷市 小野克枝

人間の特技 笑顔が作れます

水見市 関美子

耳を閉ぎせ風は言葉をつくるから

大阪市 江城修史

義理一つ返せば心の灯がともる

大阪市 川口弘生

見えぬとこ結ばれている夫婦岩

香川県 三井酔夢

炎の輪くぐり抜けければ凡婦かな

松原市 谷垣史好

売れ残ったらどこへ行くのか甲虫

宝塚市 傍島静馬

年よりが動きすぎるのにも困り

守口市 羽原静歩

生き抜いて流転の風を聞くばかり

奈良市 宮口笛生

かあさんの墓 かあさんがいるぬくみ

島根県 小砂白汀

さりげなく礎石は塔を支えきり

倉敷市 能登原白水

反省がこんなきれいな朝にする

堺市 高橋千万子

やりばない心の迷い香をたて

出雲市 原独仙

逆境の友へ秋風そつと吹け

富田林市 和田維久子

凍てた道踏みしめ女の遠い旅

富田林市 木村弥栄子

ときつける櫛へ炎はさめやらす

今治市 越智一水

水仙が咲いたよ仏さまへ切る

大阪市 福井野迷路

おとなしい方と仲人四捨五入

松江市 恒松町紅

男嫌いなどと化粧に念が入り

青森県 木村 涼人

綻も縫えずGパンよく似合い

兵庫県 遠山 可住

包帯を尋ねてくれぬのも淋し

宇部市 平田 実男

増築をするほど歯医者へ持って行き

大阪市 金井 文秋

こっちの水は甘いから孫が来る

水見市 関 美子

無い袖を子に振り夫婦寝正月

米子市 八木 千代

柏手が澄んだノ叶えて貰えそう

岸和田市 葛城伊三郎

味気なく下戸と花見をして帰り

八尾市 香川 酔々

焦っても廻転椅子は向うむく

神戸市 小浜 牧人

嫁ぐ娘の心へ持たす銀の鈴

八尾市 大 路 美 幸

子が生れその子が生れ消えるのみ

大阪市 中 川 滋 雀

ターミナル一期一会の群ならず

倉敷市 藤井 春日

今のとこ眠れる獅子で居てやろう

倉敷市 竹内 翁 童

手付金これが苦勞のはじめです

大阪市 河野 君子

球根のまんまで終る性哀し

富田林市 岩田 美代

歌留多とる過ぎにし恋の声上げて

兵庫県 遠山 可住

ハラハラしていても父の座に父が居る

水見市 関 美子

朝市でまだ憶病なエビのひげ

大阪市 宮尾 あい き

渦潮のここが見せ場とかもめ舞う

大阪市 小出 智子

保護色の中で虜になっている

倉敷市 松下 梁 水

泣くときに泣ける路傍の石でよし

岡山県 出原 敬一

役どころ心得て来る割烹着

☆以上の句は路郎賞最終選に残ったものです。以下は中間発

表三回の中から、二句以上の候補句は一句、四句以上は二句、六句以上は三句、編集部選で追加発表します。(同一句は割愛)

青森市 工藤 甲吉

妻逝けば地球も落ちてゆく思い

温くめても温くもらぬ手のむなしさよ

堺市 高橋 千万里

ポイントはないさコンニャク男なり

話中 まだ話中 十二月

倉敷市 松下 梁水

敗けて来た拳で拓く新天地

身勝手な奴だ補聴器外しとる

富田林市 木村 弥栄子

傷口をなめ合う余祐ない若さ

スミ吐いてイカ透き通るまで干され

香川県 三井 醉夢

淋しさを飲めばいよいよ雪明り

近寄れば消えるあなたを虹に見た

大阪市 小出 智子

見失なうまいと私を見つめてる

空の青 貧しきことは思うまい

神戸市 小浜 牧人

お喋りの女が火種置いてゆく  
転がったままじゃが芋は芽を伸ばし

大阪市 不二田 一三夫

北まくらさせた姿の日本地図

米を買う紙幣はこんなに疲れ果て

倉敷市 本田 恵二郎

耐えること名もなき石に教えられ

仮面脱いでひたる湯舟のくつろぎよ

大阪市 本多 柳志

花咲いてとなりへものが云い易し

移り行く世相にうとい広辞苑

鳥取県 鈴木 村諷子

末弟に親を見させて名士なり

倉敷市 能登 原白水

頂上は小鳥に残す柿と決め

今治市 越智 一水

貧乏を愛しきれない詩を作る

島根県 堀江 正朗

指触れて確めるより菊の香の

島根県 小砂 白汀

鈴虫の骸じ茄子を喰い残し

大阪市 西出 一栄

それぞれに話が異うピヤガーデン

八尾市 宮西 弥生

敗北の利那を飾るのも女

松原市 谷垣 史好

春の宵お前理屈が多すぎる

宇部市 平田 実男

後添いが取りしきって三回忌

神戸市 仲 どんたく

灰色に女包んで尼の春

宝塚市 傍島 静馬

洗濯好きの妻に着ごろを脱がされる

泉大津市 村上 春巳

一〇円の葉書大層なことを書き

大阪市 山川 阿茶

点 点 線になるのを好まない

大阪市 宮尾 あいき

夫の墓碑せめて私の名を添わせ

岸和田市 高橋 操子

よく似合う人に巻かれよ春の帯

大阪市 河野 君子

心に棲む母性に負けて春に閉ず

富田林市 岩田 美代

此の人もうなずく事を知らぬ貌

豊中市 橘高 薫風

隠健を徳となすなり福寿草

米子市 八木 千代

銀婚の道探り合い認め合い

大阪市 川口 弘生

耳鼻科医の春は鼻血の患者から

大阪市 大坂 形水

空いている方の寿司屋を通り越す

大阪市 江城 修史

だまされた日の合鍵は温かった

大阪市 吉田 圭井堂

複雑な気持ちで老齡金を受け

倉敷市 小野 克枝

哀しみと隣り合わせの強さなり

藤井寺市 西 いわを

一ミリに足りぬ虫さえ歩を刻む

堺市 河内 天笑

琴の音にのる時 落花蝶となる

和歌山市 野村 太茂津

鈍行はよし無人駅から春を乗せ

高槻市 若柳 潮花

虫抱いて落葉も冬の底に寝る

美祿市 安平次弘道

波頭避けて寄り合う紡い舟

兵庫縣 遠山可住

それぞれの調和がここへ寄つて春

富田林市 板尾岳人

寝ころべば母の膝かも知れぬ峰

大阪市 金井文秋

地下鉄とバスは只です寝たつきり

八尾市 高橋夕花

花の種まいて尼僧の恋埋ずむ

倉敷市 稲田豊作

忘却の流れに亡妻が溺れそう

竹原市 森井菁居

いつまでも敗者でおれぬ矢をつがえ

(一般の部) (順不同)

小出しする愛 円周をかけている

柏原市 小谷葉子

春闘の夫を信じてみごもれり

岡山縣 谷川渥子

引金に指掛けたまま説く平和

羽曳野市 麻野幽玄

弘前市 小山内貞男  
充ち足りて共産主義をやめたよう  
大阪市 秋田茂

空の青とて童女の瞳には勝てぬ

和歌山市 若宮武雄

だらだらの一日欲しいという暮らし

新見市 吉田落猿

どなたにも交わすあいさつ森の道

高槻市 山田スミ子

アスファルトの割目雑草が枯れる秋

東京都 宮崎美津子

二人連れよけてよけてひとりの雑踏

大阪市 神夏磯道子

雑言を消して聞く耳を持ち

大阪市 内藤ますえ

われぬ食器で食べるまぜ飯

竹原市 岩本笑子

言葉にもいろんな温度ありました

今治市 大本バット

娘三人嫁かぬ比べをする暮らし

青森縣 荒田つる

満り足りて誰より先に酔いつぶれ

榎原市 西本保夫  
云い負けて黙々と読む学術書  
今治市 真山国彦

東京へ電話かけいと云う手紙  
高槻市 竹内花代子

留守番へ働く者のぐちを云い  
三重県 川上富子

記念撮影人間様を盛り合わせ  
守口市 岸本豊平次

共稼ぎおかずの方が早よ帰り  
宝塚市 吉田とんぼ

五十坂天気夫人の名をもらい  
和歌山市 秋月宏方

太古から楽譜は変えず波の音

竹原市 三宅不朽  
鉦研ぐ身ぬちに泉湧くごとし

羽曳野市 麻野幽玄  
振り返る度に角度の変る墓碑

東京都 山根白星  
恩師会うたびに妻君元気かね

高槻市 竹内花代子  
落ちつかぬ花むこ様をたしなめる

守口市 岸本豊平次  
プラットでほっとした手も振られてる

岸和田市 池田香珠夫  
老いの旅方向音痴の妻連れて

名古屋市 大林曲ん手  
まだ先が見たい老眼鏡を拭く



北川 春 菓 著  
川柳随筆と句集

「聴 診 器」

十二日中旬発行  
送料共 千円

川柳医博として知られる著者の川柳随筆は  
定評がある。またそのエッセイは学者らしい  
筆法で路郎先生も高く評価されていた。

春 菓

もの十六篇、川柳は四十年間のうちから三百  
句を自選し、ここに「聴診器」が発刊される  
ことになった。(美麗豪華本)

発行所 千573 枚方市落東二九一二

われながら完全癖に腹が立ち  
この句が示すように著者は完全をモットーと  
されている。数ある随筆の中からより抜いた

取次 北川 春 菓  
川柳塔社

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

正本水客

泣くかわり笑えば笑うこと多し

堀江 正朗

人間こころの持ち方ひとつで世の中が明るくも暗くもなる。妻入院の前書があるが笑うことの多い日の一日も早いことを祈る。

ポンコツ車さあ抜き給え抜き給え

本田 惠二朗

人生を達観しきった男の姿が眼に浮かんで面白い。

足組んだ爪先きでものを考える

都 倉 求 芽

眼が物を言うとはよく聞くが、爪先も物考えるものらしい。描写が生きている。

朝顔の種子を宿して残暑かな

藤 井 明 朗

俳句的な素材を俳句的な表現で句にして、そこに川柳があるのは嬉しい。

故郷の山彦だんだん小さくなり

柳 楽 鶴 丸

山が低くなってきた訳ではない、辺りがだ

んだん開けてくる心理的なイメージダウンであらうか。

面会の夫の爪切るほどに癒え

堀江 芳子

壺阪そのままの夫婦像、入院中の句主の恢復振りが偲ばれて嬉しい。

秋はしきりに私を誘い出しに来る

小 出 智 子

樹々は紅に空はあくまでも高い。誘い出しにくるのは自分の心であるかも知れない。

男には振れないハンカチさようなら

高 橋 鬼 鏡

別れにハンカチを振るのは女性の専売特許であるらしい。端的に言い切って面白いが下のさようならを何とかしたい気がする。

アメリカの自信大統領を斬りすてる

小 砂 白 汀

自信とはうまい。それに付けても日本の自信のなさが思われて何とも情ない。

敬老の日を庭に出て松手入れ

竹 中 肖 二

満ち足りた老後の日々の暮しが偲ばれて心楽しい、敬老の日などをわざわざ設ける馬鹿らしきとは対照的に。

始末書をとられ達筆褒められる

藤 井 春 日

苦笑いの表情が見えるようで可笑しい。伝票を揃んで出るも男福え

福 島 鉄 児

揃んでの三字が句をピンと生かしている。母老いず女の虹を詩に読み

母老いず女の虹を詩に読み

和田 維 久 子

いつまでも母が若い心でいることは子供にとって限りなく嬉しい、時には軽い反拗を感じるほどに。

へんくりを八ツさきにする孫の数

藤 村 女

八ツさきと言うどぎつい言葉が、へんくりと孫という言葉に対して何となくユーモアを生み出している。

或る別離柳が少うし揺れただけ

大 路 美 幸

絵になる情景、淡々とした描写が好ましいが別離と柳の間を一字明ける配慮が欲しい。

膝まげて寝る朝があり夏終る

神 原 秀 子

暑さも終りだなど思っているうちに秋が顔を出し冬が駆足でやってくる。壮年期を過ぎた体力の移りが何となく肌感じられる。

永 宗 宗 義 著

柳 句集『高瀬舟』

12月中旬発行予定

四百三十句を収めたもの。浜田久米雄氏が指導された宗義氏の第一句集である。

定価など、くわしいことは次号で発表

します。

〒709-005 岡山県和気郡佐伯町

加三方 九〇七

永 宗 宗 義

永 宗 宗 義

永 宗 宗 義

永 宗 宗 義

永 宗 宗 義

# 水煙抄

川村好郎選

和歌山市 井上マサ子

絵になった二人へ秋の彩濃く

色あせた艶思の出がつめてあり

値上りの不満もつめた市場籠

秘めた恋コスモスの紅に似て哀し

切なさを伝える術もなく孤独

大阪市 神夏磯道子

働いてはたらいで悲しみ遠ざける

ことという時に傍観者に変り

遠廻りしても開かない重い口

元氣すぎる祖母の便りを不安がり

手さぐりの人生幸せに終り

東大阪市 崎山美子

さわやかな余韻のこして愛終る

ボンコツを相談役へとほうり出し

里帰りさせてこちらも水入らず

借り着して錦をかざる村まつり

風雪にたえた野仏柔和なり

大阪市 小谷清女

何もかも忘れて散策秋日和

障りない夫婦の会話わびし過ぎ

うち溶けぬ心悲しきめぐり会い

抜け殻になりそう末っ子に嫁かれ

箱植えの菊放つとかれくじけない

和歌山市 津田与史

おトイレに活けられていても菊は菊

白菊が好きという娘が美しい

五日制ぼつぼつ遊ぶ種が尽き

川原のすすき誰かを呼ぶしぐさ

和歌山市 吉野富江

倅せは日記も空白続く日々

インフレの波に流れたマイホーム

敬老日などと老人意識させ

背水の陣で男を賭けて見る

和歌山市 若宮武雄

生き甲斐をみつけたとこにいた歓喜

人柄といわれる梓の中を生き  
動けない水は波紋を望んでる  
風当りなるべくさける低姿勢

岡山県 白 岩 文 衛

あかね雲少年ころを決めました  
はにかみは真珠の艶のしたりか  
本心を言えば裏切ることになる  
本当の君の声かと風がきく

鳥根県 槻 谷 一 葉

米価値上げ稲穂がおじぎをしています  
椎の実は昔のままに落ちていた  
鍵かけて少さき城にこもりたし  
しゃべり続けて誘惑の手をのがれ

鳥根県 福 田 陽 山

階段で息つくたびに年を知り  
お爺さんと呼ばれる声にやつと慣れ  
床の中寝た気もせぬのに夜が明けて  
物価高船乗りのように梶まかせ

大洲市 宮 尾 みのり

地球という小皿の上でいがみ合い  
初恋を言うて中年漫画めく  
妻という母という枷 抜きたい日  
夢想家の妻は掃除をままた忘れ

寝屋川市 江 口 度

一億分の一の麗女と腕をくみ

やっと出た運の芽つみにくる身内  
素人の商売税金分を忘れてた  
ふるさとの話マツタケ届いた日

弘前市 小山内 貞 男

背を向けた子供案ずる嵐の夜  
小半刻紅葉の中に吾れを置き  
法律の死角でボスの目が踊る  
エリートが動けば向い風となる

岡山県 長 尾 保

名犬と言われ自由のない鎖  
人間が出来すぎていて頼りなし  
貧しさに負けず貧しき菊生ける  
天に星地に人間の夢が消え

吹田市 藤 原 世史春

観念の蝶蝶値札に黙秘権  
弁解はしない狙上りのった鯉  
賃上げと値上げで何の蓋をする  
改札機の方がお愛想舌を出し

柏原市 小 谷 葉 子

愛の流れに確かな灯をともす  
青春がほしくジーンズで駆ける  
噂の女で独楽に酔うている  
人妻となつて涙腺太くなり

和歌山市 内 芝 としよ

鈍い子は鈍さの良さを見て育て

ささやかな献灯我が名に灯が点り  
見残した夢をいまだに追いつづけ

和歌山市 樫村 ふみよ

自由なき犬はくさりのままお産

信号を無視してゆきたい人通る

ドシャ降りの雨もいとわぬ飲み仲間

島根県 谷岡 芳枝

労わりの一言わたしを走らせる

秋風をかりるすすきの相愛か

地にかえる萩も思い思われ咲いた仲

和歌山市 秋月 宏方

もう何もいうまい世代違う孫

恍惚の字のない辞書を持ち続け

古稀もすぎ前途洋々ともいえず

守口市 岸本 豊平次

引越しの荷物ほこりのまま運ぶ

相槌も出来ず隣りの愚痴を聞き

汗かいた日曜大工が風邪をひき

大阪市 稲本 凡子

もうグチも忘れ素直な墓詣り

孫が来て静かな城が湧きかえり

生がいを孫に移して朝を出す

肩の手が少し冷たい月の窓  
鳥取県 林 露 杖

操短の一日を妻とときのこ狩り  
南無菩提恨悔懺悔と鐘を撞く

尼崎市 中谷 利美

成行をみて本腰を入れる肚

運不運 実力の差は紙一重

その筋もよく黙ってる旅みやげ

須賀市 平栗 金太郎

手を開きお駄賃の硬貨たしかめる

返り咲きならず大臣辞めたまま

背を向けた男へ炎まだ消えず

大阪市 堀口 欣一

老人のボタンちぎれたまんま

雀右衛門女盛りというところ

大阪の寿司屋河内に住みついて

備前市 武内 雅堂

気の毒なひとにはすまぬうれし泣き

冷たさを知っているから尾は振らず

うきうきと歩く妻には打ち明けず

豊中市 安藤 寿美子

人間ドック異常なしとは物足らず

半日で全快にする主婦の風邪

洗濯が気になるほどに熱下り

転落の詩集落葉が炎えている  
餌代も採れぬ仔牛を買い戻し

八戸市 安田 勝己

ほたて貝庵とお前の海だね

愛媛県 小山 悠 泉

買いそうな客と見抜いた娘の愛想

まだ抜けぬ風邪にじれてる菊日和

宝塚市 吉田 とんぼ

見栄捨てて生きる軍手をはじとせず

血圧をコロット忘れた嬉しい日

米子市 江原 良 二

捨るにも世代のズレでもめて居る

天高く孫のおむつをひる返し

羽咋市 三宅 ろ 亭

肩肘を張った生活が捨て切れず

木枯しの妙音サッシに通じ兼ね

歯科医院番号札であつかわれ

コンバイン化 利鎌の腕も振るわれず

十年前の会計簿奇蹟かと思ひ 尾崎市 大垣 たもつ

夫逝き夫婦箸入れ広くなり

親は親 好きに暮せと割り切られ

遠き日の亡き夫の文夜寒く

看護婦の顔が痛み止めになり

院号をつけてもらうも金次第

二十年喰わえ煙草で骨拾う 大阪市 秋田 茂

みそ汁は今朝も確かな妻の味

白い杖 人の心を探がす秋

やり繰りのにが手な妻が肥えている

夕陽落つ いつかは僕も行く世界

ガタガタのミシン妻には素直なり

高物価への怒り 秋風身に泌みる 新見市 吉田 落 猿

慰藉料で飲みに来て居る松葉杖

北海道紀行

人生にこんな日もあり待避線

北海道両手に提げて連絡船

印相学当るとしても万の金

クラークの前入り替り立つ夫婦 今治市 渡辺 伊津志

銀杏一枚ページへ拾う女の子

出世する気使いのないのに魅かれ

虫の声月の雫へ萩が咲き

喜怒哀色に表わさずなり名匠とか

詩仙堂

姫路市 大原 葉 香

隙のない労使対立紫煙舞う  
人様もまだ住めますととんぼ飛ぶ

橿原市 西 本 保 夫

節約のリーダーにされた平社員  
雑用は何でもかんでも平社員

岸和田市 池 田 露 子

年寄は歩きヤングは乗り回わす  
スモッグの中に育ってミス日本

新潟県 高 野 不 二

本当の意見は酒が出てわかり  
老今年金積立てにして夢を追う

寝屋川市 福 富 隆 子

神様へ供えたその手で又つまみ  
洗濯機厚物入れれば怒り出し

伊丹市 檜 谷 漫 柳

不景気になると社長は温和しく  
停年のやすらぎも無し自営業

大阪市 横 地 正 彰

忙しい仲人息子の嫁はまだ  
ダンボール集める老いに暮の風

愛媛県 小 笠 原 仲 美

葉雞頭もえて嫁来る日が定まり  
酒の手も息子に敗けて冬に入る

出雲市 谷 口 あきら

その努力生かして強くピリの子よ

菊香りサア一年の総仕上げ

島取県 伊 藤 静 枝

手料理を重宝がられて調子づき  
娘が走り孫も走って体育祭

青森県 波 田 だ お

クラス会先生だけが若くされ  
ラロック証言持ったコップが床に落ち

島根県 松 本 文 子

枯スキ赤い夕陽が欲しいのか  
大空へ心を閉じたまま見上げ

島根県 宍 戸 千 草

使い捨て出来ぬ明治の祖母達者  
ワイシャツの紅に妬いたのも昔

出雲市 藤 井 晴 月

カーテンの白さおとめの日のように  
あわてないこれが私の処世術

鳥取県 加 藤 茶 人

プライバシーすれすれまではのぞく記者  
波状ストもう慣れっこのペタル踏む

兵庫県 高 橋 近 江

座禪足今宵芦原の湯に癒やし  
反論へとるメモの眼は瞬かす

島根県 岩 田 三 和

親からのバトン落したまま走り  
一円が落ちたと教えてくれる人

鳥取市 大塚 豊生  
やんわりと諭したあとの子の寝顔  
平凡に生きる夫婦で折り返す

鳥取市 岸 本 無人  
大怪我をしてから人間らしくなり  
値上がりにもう趣味でない浮子を見る

今治市 古 野 伶 人  
自家用車無ければ住めぬ分譲地  
英語塾幼稚園から二浪まで

八戸市 島 田 昭 治  
生活の知恵借金がうまくなり  
値上げ分湯に浸ったらのぼせ気味

高知市 古 谷 恭 一  
愛犬の輪禍へ誰を呪うのか  
缶ビール車窓に映る僕がいる

鳥根県 飯 塚 虎 秋  
世の乱れ志士海舟の出番待つ  
亡妻の精さざん花ふくらむ一周忌

鳥取県 勝 山 紫 宏  
金送れタイミングよい子の電話  
嫌なこといっそぶつかる事にする

鳥取県 福 田 保 子  
ヘルパーの笑顔へ老人励まされ  
売却地荒れたまんまで秋近し

鳥取市 松 本 永 治

三代も続くノレンの色が褪せ  
Gパンにはきかえ旅の顔になり

倉吉市 泉 風 庵  
この人も交通事故か車椅子  
内情を知らず冷たい言葉吐く

泉佐野市 大 工 静 子  
手造りで御先祖様も飽きている  
子なき妻去れと言われぬよき時代

松江市 梅 本 登 美 也  
おしゃもじもあつとおどろく値上げ巾  
鴉の目柘榴割れる日知っている

大阪市 新 川 貞 祐  
こぼれ花男やもめの三周忌  
風連洞照明に浮く草の青

高知市 竹 崎 寛  
解約をしてまで支払う税である  
息抜きをたまにはしろと青空が

岡山県 船 越 洋 之  
インフレの流れに負しい杭を打つ  
田芯にいる行楽地の父よ

呉市 佐 久 間 文 明  
泣き所分ってからは御し易し  
額の字がひきしめている社の気風

大阪市 内 藤 ます え  
天ぶらになって紅葉の世を終り

華やかな振り袖秋が匂います

高槻市 山田 スミ子

名月と寝床に入ってから気付き

大阪市 平井 露芳

流行を追う娘へ母はついてけず

笑わせる孫が人気の涼み台

岸和田市 池田 香珠夫

摘果と云う名でミカン葬られ

堺市 栗本 藤持

難局を越えてガクンときた気落ち

名古屋市 大 林 曲ん手

インフレに買物籠は大きすぎ

富田林市 奥井 晴子

ためらった瞳にためらわぬ蟻の列

赤穂市 谷口 赤童

大和めぐり薬師如来に魅せられて

今治市 岡部 正則

運動会折れそうなのがよく走り

新潟県 市川 一峯

帰るとい言葉の響き余情あり

西宮市 山田 喜代子

盆栽は余生の手にはさからわず

河内長野市 井上 喜醉

独酌で誰にかまわず泣いた夜も

松江市 岡崎 雪美

じじむさい男でもよし妻が惚れ

倉敷市 高山 みどり

労働の汗と思えばよいにおい

大阪市 浜西 駒子

運動会放送部長は孫娘

香川県 伊藤 親子

敬老の日ニュースは暗い事ばかり

大阪市 須浦 つね

割りきれぬところに浮世の面白さ

滋賀県 柚木 踏草

テレビ料理全部見る趣味お忙し

大阪市 花田 繁子

インフレでふくらむ地球儀は軽い

今治市 大 本 バット

成せば成る家訓の一ツ叩き込む

大阪市 坂本 喜洗

借物であろうと紋付着た写真

今治市 伊藤 藤一郎

老い忘れ今日は楽しい栗ひろい

大田市 村島 秀村

香水のシミが残ったような恋

今治市 今井 松花

クリスマス雪が降らずに雨が降り

岡山市 西田 溥子

水煙抄

### 秀句鑑賞

—前月号から—

浜田久米雄

勞りの一言うれしい母である

小山 悠 泉

朝から晩まで家事にいそがしい母である。その母の苦勞は当り前のようなことにしている家族ではあるが、ある日ある時心からなる勞りの一言がかけられるのがこの上ないうれしい母の胸であらう。すべからく時にはこの一言をかけて上げたいものだ。

おばはんが素直に聞ける年になり

神夏 磯 道子

年のせいだとも言えるしあきらめの心でもある。はじめのうち自分ではまだ若いつもりでいるのに「おばはん」とはと頼にさわった日もあったが。

ブラットホーム他人の別離ドラマめく

宮尾 みのり

他人同士の別れであるから客観的に見てドラマととれるので、これが自分の別離であらう。

ばそれどころではない。人間は勝手なものである。

お色気も欲も薄れて萩の花

谷岡 芳 枝

萩の花にはどぎつい感触はなく清楚な秋の風の中にゆれるさらりとした風情である。萩の花を見る人が萩の心になって感じた秋の気がすっきりと出てすがすがしい。

通帳の目減り寿命に容赦なく

檜 谷 漫 柳

老後の淋しさが通帳にまで出てくる味気なさである。年はとっているのにそれに反して通帳の中味は減る一方であるから行先が思いやられる。こうした老人がふえるばかりだからもっと老人福祉を考えてもらいたい。

億の金散らして入れたたるまの目

市川 一 峯

だるまに目をひとつ入れるのに何億という金がばらまかれるのであるから世の中は不思議である。選挙に出る気持がさらにない人にとっては全くもったいない話ではないか。

申し訳ないが年寄り持ち直す

池田 香 珠 夫

年寄りの寿命に対するうがちの句だ。申し訳ないが辛辣によく利いている。死んでしまえば片付いてやれやれと思う人もいるなかで持ち直すのは寿命があればこそであきらめね

ばいたし方あるまい。

真ッ白く干して露台上の女の詩

三木 静 夫

物干しに真ッ白い洗濯物が干し上った時、そこに女の幸福が、満足感が漲るのだと思ふ。そんな時に詩を作りたい人は作ればよいし何かを小声で口ずさむ人もいることである。満ち足りた女のひと時の空はきれいだ。

隣まではいて筆の心足る

長尾 保

筆の心は人間のころである。自分の家の前を歩いてしまった手がつい隣の家の前まで動いて行った。それでその人の心は満足しているし筆もだまってついて来てしまった。満足はこんなところにもころがっている。

台風に釘二三本で打ち向い

岸 本 無 人

いまだに人間の力ではどうすることも出来ない台風のあの大きな力に立ち向う人間の弱い抵抗が釘二三本でよく出ていると思う。釘二三本でも打たないよりはましであろう。

ご投句におたよりに

### 川柳塔柳箋

一冊百円 送料七十円

# 百人一首と川柳

(6)

富士野鞍馬

## 九小野小町

花の色は移りにけりないたづらに  
わが身世にふるながめせしまに

(古今集)

この歌の文句をとって多くの川柳が作られて  
いる。

百人に容儀すぐれし花の色

万仁(五四四)

生娘で一生くらす花の色

幸司(七三九)

うつりにけりないたづらはせず終り

和国(一三五二〇)

花の色身のいたづらはせぬ女

狂人(一五五二九)

花の色は美しけれど実はならず

五蝶(五六二)

百人においれのわるい花の色

(拾五〇)

わが身世に肌をふらぬを百へ入れ

等々一生独身美人として詠まれている。  
松里(五八四〇)

小野小町の生涯は伝説化されてしまつて、  
確かなことはわからない。ただ美人で和歌の  
上手であったことは推察できるのである。

「徒然草」にも「小野小町がごと、きわめて  
さだかならず」と書かれてある。しかし、い  
ろいろの古書から考察すると、小町は、小野  
篁の孫で、出羽の国司小野良実の二人娘の妹  
ということになって出る。十三才の時天長五  
年(八二八)宮中に出仕し、仁明帝の皇太子  
時代、采女(うねめ)として御食事の係りを  
つとめていた。それからずっと宮中に仕え、  
歌の名作家であった。

紀貫之が「古今集」の序文に

「小野小町は、いにしえの衣通娘の流な  
り。哀れなるようにて強からず、言わば、  
よき女の悩める所あるに似たり。強からぬ  
は女の歌なればなるべし。」  
と評して、小町の歌には欠点がないと書いて

いる。それを「穴なし」と洒落て伝えられ、  
古今の序小町ばかりは穴がなし

河楊(四九八)

木馬(九二〇)

と川柳にも作られている。それをまた、一生  
独身で過したので、生理的の「穴なし」にし  
てしまつて、それを詠んだ川柳も多い。

穴もない辯に小町は恋歌なり

(未二九)

穴も無いくせに面影おしむ也

雨夕(二八八)

歌で見りや穴はなしとも思われず

玉貞(二〇五三)

穴ありやなしやの身でも恋歌よみ

(二四九)

穴もないくせに恋歌は何事ぞ

文和(二二七二)

気の知れぬものは小町の恋歌なり

喜知(二〇五〇)

丁百のうちへ穴なし数え込み

映鳥(三八八)

通用の出来ぬも百の内へ入れ

コセイ(八八二)

百人にさせぬおんが一人あり

川長(天七三三)

また猿丸太夫(五)の道鏡説と、蟬丸(一)

の旨とを組合わせて、

とんだ支離は奥山と花の色

(二八三)

五人目は図なし九人目は穴なし

穴なしと目なし図なしも百のうち(天六四)

蟬丸のあき手の方は穴がなし祖山(一四〇八)

穴なしも目なしもまじる小倉山赤染(五三三)

などと戯作されてもいる。若蝶(六〇四)

穴なしを五人でなぶる六歌仙左様(九六三)

極内で小町も一度外科に見せ兼輔(五二四)

などとうがった句もある。

そうして小町は、仁和元年(八八五)に六

十九才でなくなつたといわれているが、その

生涯の変遷の伝説を「七小町」として、謡曲

などに作られ、川柳も

七小町気楽な時もなかりけり(武三三)

と詠んでいる。

その「雨乞小町」を

雨乞の時分が小町和歌盛り和文(六六六)

雨乞の頃が小町の和歌ざかり海月(二七一)

九人目はあめもふらせた女なり(明八義四)

ぬれごととは小町神泉死ばかり玉草(三五二〇)

神泉苑で雨乞いの歌「千早ふる神も見まさ  
ぼ立ちさわぎ、あまのことがわの樋口あけ給  
え」と詠んだ。

「草紙洗小町」

小町が仕事萬葉のあらひはり集馬(八三二)

せんたくでさっぱりとした和歌の論三松(六〇八)

宮中に歌合せがあつて、小町は「詩かなく  
に何を種とて浮草の、波のうねうね生ひ茂る  
らん」という歌を作つたが、それを大伴黒主  
が探知して、万葉集に書き込み、それを古歌  
だといつたが、洗われて曝露した。

「通小町」

気強いと気の長いとが九十九夜(拾四一〇)

いい女公家を百度あるかせる玉簾(傍二三)

この深草少将の百夜通いは全くの虚構であ  
る。

「鸚鵡小町」

口真似で小町あだ名が一つふえ狐声(二〇三〇)

口ごたへだに小町をばほめるなり(安九梅一)

小町が零落して関寺の辺りに居た時、勅使  
新大納言行家が来て「雲の上は有りし昔にか  
わらねど、見し玉だれの内やゆかしき」とい  
う御歌を賜つた。その返歌に「内やゆかし  
き」を「内ぞ」と一字かえただけを詠んだ。

「関寺小町」

関寺の姿に花の色はなし五蝶(五四四)

おもかげが變つて小町寺参り建長(二五四)

関寺の僧に歌物語りをした。(二二)

「卒都婆小町」

引とりて無くてそとばに腰をかけ(明元九二)

返答も卒都婆小町は地口でし(二二)

そしてそこの卒都婆に腰をかけて休んでい  
た。

「清水小町」

糸薄小町の穴を通すなり和文(五七三)

花の色移り変りし枯れ芒木刈(二五五)

旅僧が市原野をよぎる時、どこからとなく  
「秋風の吹くにつけても穴目穴目」ときこえ  
たので、それをたどつてゆくと、鬘髻があつ  
て、その眼のところから芒が生えていた。

富士野鞍馬著(ハクビ京都きもの学院)

川柳譚『きもの』 価千八百円

川柳研究家、文学研究家はもとより、  
きもの研究家にも貴重な異色の書であ  
る。

日本人であるあなたが、どの程度「き  
もの」について知っておられるか――

申込所 〒108 東京都港区白金台五丁目  
十三番十五号 富士野鞍馬

十三番十五号 富士野鞍馬

# かちがらす

— 旅人作品鑑賞 —

## 香川酔々

### 二階を降りてどこへ行く身ぞ

昭和十三年私は佐賀高等学校理科甲類へ入学した。全寮制だったので一年間は寮ぐらし。佐高は当時本郷村という佐賀市のはずれにあった。

寮生活で先輩たちから、こっぴりしぼられいわゆる高校生かたぎを植えつけられるのである。

二年になると下宿が許される。ある銀行の抵当となった屋敷の離れに住みこんだ。母屋に管理人夫婦がいて、食事は作ってくれた。裏庭は、庭というより、小さな森のようだった。

そこにかちがらすの巢があった。

一名朝鮮がらすともいい、豊太閤の朝鮮出兵の際、鍋島藩の武士たちが、持ち帰ったと伝えられている。

カラスよりすこし小さいが、カラスのくせに、白い部分がかなりある。

ギャー・ギャーというような啼声でカア・カアとはなかない。

佐賀市といっても当時二万そこらの人口である。下宿生活は味気のないものである。

ポータブル・ラジオなど、そんな洒落たものもない時代である。本を読むか、友人の下宿へ、だべりに行くか、または町をぶらつくか、ほかにすることがない。

しかしそれなりに町は静寂そのもので、散歩の途中には、お堀があり、多布施川のほとりなら、蛸もとんでいるという風情である。さて、路郎の句。「旅人」の巻頭を飾る句である。

路郎若かりし頃が、そのまま読みとれる。

大志抱きて、いまだ志を得ず、その身は二階を降りて、どこへ行くとうとするのか。撫然

たる青年の姿が髣髴として浮ぶ。

巻頭に据えたのも、亦宜なるかな。

### 見渡すとユダのころをみんな持ち

レオナルド・ダ・ヴィンチの大作に「最後の晩餐」がある。いうまでもなく、最後の時が近づいたことを知ったキリストは、十二人の弟子たちと一夜夕食をとることにする。

キリストの血と肉を象徴するブドウ酒とパンを与えて別れをつげる。その中にキリストを裏切ったユダもいる。しかし弟子たちは誰が裏切者かを知らない。

レオナルドは、「あなたがたのうちの一ひりが、わたしを裏切ろうとしている」というキリストの言葉が、弟子たちに衝撃を与え、騒然となる一瞬を捉えて、この名作を描き出した。ユダは半身暗い光の中にいる。しかも弟子たちの中で孤立しているように描いていない。

透視画法でかかれたこの絵の中で、各人物が躍動して見える。

キリストからみると、弟子たちは、まさに「見渡す」という言葉がびたりとあてはまる。路郎がこの句を詠んだとき、恐らく、この絵が脳裏にあって、自然に「見渡す」ということばが浮んだのであろう。

あるいは路郎は、いつも不朽洞会の弟子たちを見渡していたのだろうか？ いやそれはうがち過ぎであらう。

### 天井にいつまでおさへられて生き

大衆小説の読みすぎかも知れない。天井とあらたまって言われると宇都宮の吊天井を思い出す。

これは將軍に頭を押えられた大名が吊天井で將軍をなきものにしようとする小説である。史実かどうかは知らない。

この句やはりこの大名のような心境なのだろうか。

一読するとハハアと分かったような気がするが、よく考えると天井が何を意味するのかどうもよく分からない。この句の成立したときの状況がつかめれば、すつと理解できるのかも知れない。

ただ素直にれば、天井の低い二階借をしている背の高い青年の鬱積の情をそのまま詠んだものと解せられる。

## きのう・きょう

### 本多柳志

◇柳志の知人に、釘貫、徳珍、大鍋という珍名の人がいる。今度は少し砕けて人の苗字つまり姓について書いて見る。姓のことを昔はかばねとも読み古代は氏族の長に対して天皇から賜わったものである。先ず職業によるものに連、宿称の類、皇統によるものに橘、源平等、功績によつて下賜されたものには藤原、雀部があり、世職などがあるものに、齋部、中臣、物部、酒部などがあり、世官からきたものには国司、郡司、庄司、保司、左近、右近などがある。又地名から採ったものに秋田、木曾、新田、足利の類。氏族の内部が増加するにつれて分れたものに藤原から近衛、一条、二条、西園寺、徳大寺、正親町と色々あり之らを姓としている。姓は由緒あるものとして子孫に伝え、家筋の称呼であると

同時に官名のようなもので、この間尊卑の等級も自ら定まっていたのである。江戸時代までは農工商の庶民階級には之がなかった。富貴な商人や名主などの有力者が特に許されて苗字帯刀御免と称して名譽としたものである。それが明治三年九月に戸籍登録に必要のため、平民にも始めて姓氏を許されたので、古い縁故を辿って歴史ある姓を用いたり、地名に依つたり又は自分の好みで家の前に川があったので前川、家が村の東にあったので東口といったように勝手につけたので大騒ぎを演じて、今日の如く千差万別の姓氏が出来たのである。それまでは所の次に自分の名前をつけて俗称していたのだ。神戸村の長吉、森村の石松、さては国定の忠治といった具合に。

◇次に私達川柳作家の雅号の事だが、本誌の雅号ぶつちやけばなしが毎号誌面を飾って、大変興味ある読みものだが、之ら一連の記事を読んで思うことは、雅号の曰く因縁や命名の動機やその内容から、いくつかのパターンに分けられるようである。

その一つは本名をそのまま雅号にしたもの、例えば一二三、克枝、瑞枝、太茂津、静馬さん等である。次に本名をもじつたり、その発音をそのままに文字だけを変えたものに、鬼遊、奇童、三幸、一保、弘生さん等がある。その次に割合多いものにその職業や趣味を土台にしたものに、拳法、鮫虎狼、雀踊子、鶴丸の諸氏がある。又特別の例としては長唄の芸名をそのまま雅号にされた、阿茶さんや一白水星の西を組合せて百酒としたもの

も、珍らしい雅号と云えよう。

何れにしても雅号は本名と同様自分の象徴として、大事にすべきでその命名も又慎重にすべきで、余りに茶化したものや為にする格別滑稽なものはないべく避けたいものである。雅号まで変え一から出直す気。柳志

★

### 川柳塔社 同人句集 「川柳塔」

備北新聞（10月15日付）に「新書紹介」として、句集「川柳塔」が紹介されている。そのうちから活字になった句は、

大坂形水

妙な色流行り女人戸惑わせ  
大阪の穴場 博多で聞いてくる  
会つて見たいひと居る駅へ下りてみる

仲 どんたく

送り火を大と描きて盃に受く  
子の嫁を捜す眼 痴漢と云うなかれ  
夏の夕老いにもロマン拾えそう

堀江芳子

いい着物欲しくないとき女病む  
愚痴みんな吸ってくれそう月あかり  
めでためめでたひと娘をもつてかれ

若本多久志

どれ着てゆこう 老婆も女なる  
孫の画く汽車は煙りをはいていず  
腹立てることもうとまし年の暮

と、なっているが「楽しい句」「好きな句」どれも心にしみる句ばかりで、もうスペースに余白のないがうらめしい。（EN記）



## ヨーロツパ ファッショ ン ツアーの旅

宮西 弥生

ドで見物する強行軍。再び裸のマヤ、モナリザ、ミロのヴァイナス等と対面する感激。パリは建物すべてどこから見ても正面という。それに干物一つも見えない程徹底的に街の美化対策を重んじるのである。その中をコートが無造作に着たパリイジャンに出逢う。日本の十月半ばという秋たけなわ、ブラタナスが黄ばみ鋪道には思はずシャンソン、枯葉を口にしてみたくなるのもパリイ。

シャンソンの調べにのって枯葉舞う

日中はそれでもまだ暑く若者達はジーパンに綿シャツの気取らないおしゃれに、お化粧のない素顔はあくまで質素で彫りの深い顔を一層印象深く見える。

五日目早朝よりパリイ郊外ロワール河畔古城めぐり。

十五、六世紀の昔の歴史をフランスの魂のささやきにふれる喜び。お城四カ所巡りで一日は短かく暮れる。

パリイは今やバカンスのシーズンで、人々はそれぞれに街をはなれるという。土曜、日曜日は眠るが如くに静かであるが観光客で満員。

日本人ばかりでパリーの夢あせる。

その夜はバトムーシュ(遊覧船)で夕食しながらセーヌ河畔を下る。夜だけに男と女の甘い囁やきと、ショッキングなラブシーンにごっくり唾をのむのである。

これより旅情もいよいよ佳境にして食事も馴れ、一行は元気に軌道に乗る。ただ水不足には時々苦しめられる。

七月三十一日ファッショントンツアー総数三十名は、その夜二十一時四十五分エールフランスジャンボ機で東京発北回りにて一路パリイ指して飛び立った。

期待と喜びに満ちた私達はそれぞれの自慢のファッション、その華々しさは機中で随分派手なものだった。

機中あちこちもう色直しするも旅それから七時間であんなカレジ。とうとう地球の最北端北極圏にやってくるこの感動。ここで時刻前日の午前十時半に戻す。これより時差受け警報の発令となる。

機は無事にパリイに到着。飛行時間東京より約十七時間、当然車輪は滑走路に着く事に不思議はないのに、何故か感動が抑えられない。すぐさま乗換えてロンドンへ。これより大切なバスポートの活躍が始まる次第だが、日本語の使えない佗しさにむずむずするばかり。

り。

赤い練瓦と煙突ある家々。真赤な二階建てバス。古い真黒なロールスロイスのタクシー、古めかしいもの類りに眼につくが、すっきりと広い道中に美しい花々。それよりも何んと爽やかな気候、汗一つ出ないのもまた不思議、外国へ一步踏み入れたこの幸福な旅行によかったよかった来てよかったと。

早速二日目は特別バスで市内観光。バックingham、ウエストミンスター、ロンドン塔等と早速カメラがあちこちで動く音。

王女さま見える位置にいて素通り

三日目ロンドン市外観光は、ウインザー城見学。衛兵パレードのそのすきのなさにきびしきものを感じる。

四日目花の都パリイにて。市内観光でセーヌ川に沿って、エッフェル塔、凱旋門、ルーブル美術館。ここでは時速九十キロのスピー

水だけを飲み日本へ帰りたい

まずチップたしかめてから行くトイレ

六日目パリオートクチュール某社を訪れ  
秋、冬コレクションを見学。  
女ごころに国境はなしファッションショー

パリ最後の夜は「レストラン大阪」で冷  
つ奴で日本を懲び、それからぜいたくな買物  
と相成る。

七日目空路にてスイスのチューリッヒへ、  
とんがり帽子風の屋根の家々。又お花の好き  
な国である。ところが物価の高いことは大学  
を出て初任給二十五万だと聞く。機械工業盛  
んな国にして流石に時計店が多い。

お土産にしたいひとが多すぎる

八日目インターレークンを経て万年雪に輝  
くアルプス、ユングフラウ、ヨッホへ。

途中登山電車に揺られて登ること約四千米  
余り。特に心臓病は遠慮しなければならぬ  
というきびしさ。

流石にその寒さはセーターでもコートでも  
受けていけない。白銀から白銀の尾根伝いに見  
事に「アイガー」の聳え立つ姿。生きている  
山の神秘に茫然とする。

それからの食事で忘れられないものにホン  
ジュ。柔らかな牛肉の舌ざわり。

翌日九日目南ヨーロッパの中心地スベイン  
へ。

空路にてマドリッドへ向う。その暑さは太  
陽が二つあるという。ここで始めて汗が出  
る。あちこちからハンカチが動く。

空港はきびしい程の警戒に一瞬の不気味さ

と、くすくすたいボデイ検査に出くわす。

市内観光はレテロ公園からブラド美術館、  
スペイン広場等一带に緑の少ない赤茶けた土  
の砂漠がある。時々黒い肌と情熱的な彫りの  
深い顔にどつきりとする。

こちらは日本国より物価が遙かに安いし気  
取らない生活に親しみを感ずる。その夜は深  
夜よりフラメンコの見物へ。男と女のもつれ  
る踊に体臭の強さに酔う。午後一時より四時  
まで完全に街は眠る。

もつれ合う男と女の黒い汗

お昼寝が長くて一日早う寝ち

翌日マドリッドより石と土の城壁の街トレ  
ドへの半日観光。急に暑さが加わり一行はこ  
れより更に疲労気味、副団長としては気をも  
まざるを得ない。

暑くても日焼けしないという不思議

十日目マドリッドから水の都ベニスへ。

途中ミラノ市内観光を終えてから夕方ベニ  
スに到着。途中映画「旅情」のラストシーン  
列車での別れが痛い程眼に灼きつく。

ベネチア湾に臨んだ入江の都市。交通が全  
て水路ここでは船がタクシーである。ベニ  
スも最近はいだんと沈下する悲劇と共に、  
運河もヘドロ問題で魚も少なくなつたとい  
う。

早速ゴンドラで葉土つきの運河を流す。イ

タリア男の喉は全く素暗らしい。その夜はカ  
ジノにてギャンブルにふける。

水かさが増えそうな男の喉に酔い

シェークスピアで名高いベニスの商人や、

サンタ・マリア寺院のベネチアゴシック様式  
の絵画の見事さを後にして。

翌日十一日目フローレンスへ向う。

イタリア、ルネサンスの播種地である世界で最  
も芸術の香りの高い都市。中でも絵画でのレ  
オナルド・ダヴィンチやミケランジェロ。文  
学ではダンテ、ボッカチオ、科学者のガリレ  
オ等が生れたという。

十二日目フローレンスよりローマへ。

長いヨーロッパ各国を巡つた中でもこのロ  
ーマは実に充実した上に観光客に訴えるもの  
の多いこと。中でも旅人を慰めるローマの魅  
力「トレビの泉」に思はず喝采を与えざるを  
得ない。全く尽きるところがない。「不滅の  
ローマ」/全ての道はローマに通ずとある。

はるばるとトレビの泉で探す愛

ローマで二泊した一行は最後の夜ともなれ  
ば童心復帰して遊園地へ。中でもジェットコ  
スターの恐ろしさに思わず「お母さーん」  
と叫んでローマに暮。

この胸にやっぱり母は生きている

十四日目いよいよヨーロッパに別れをつ  
げ、レオナルド・ダヴィンチ空港よりパリへ  
由東京への出発が飛行機の都合にて又々パ  
リへトランスポーター一泊するに至る。しかしそ  
の理由は明らかにされない。

十五日目パリオーロ空港よりエールフ  
ランススジャンボ機にてそれぞれの想い出をき  
つしりかきながらつめて北回り東京へ。

昂奮のさめない日本のきたなすき  
ボンジュールふと口に出てあわす

ヨーロッパ15日間の夢物語りも東京着現地  
時間17日午前6時半で幕となる。

冬 山

板尾岳人選

冬山が遭難知らぬ顔で晴れ 陽山  
 冬山を炬燵で見ている家に住み 古心  
 金剛山河内の屋根は冬化粧 春巴  
 冬山のこわさを知って尚魅力 仲美  
 晴れた日のお山のどこに雪女 古方  
 山男冬には冬の山がある 重人  
 冬山の雪に男の意地を埋め 寿美子  
 傷心の母冬山を遠く眺る 富子  
 冬山へいどむ男の目が炎える 好一  
 遭難の記事冬山の子を案じ 悠泉  
 冬山の怒り人智をあざ笑い 翁童  
 山の樹々堪えよ雪下に春の音 万作  
 暁の饗宴華麗なる樹氷 肖二  
 冒険は禁物ですと冬の山 暁明  
 冬山へ挑む男は無言なり 道子  
 冬山がきれいに撤れている 遺品  
 征服などと云うから冬山怒るなり 素身郎  
 冬山を母は納得してくれず 思月  
 雪穴で母の言葉をかみしめる 茂美  
 幾人も呑んで冬山悲びれず 春日  
 冬山へ有給休暇捨てに行き度 猿  
 冬山が白白白白とつづく 白落

冬山の嵐もわたしの詩であり 静泉  
 冬山は白一色の個性抱く 祥月  
 冬山へうさぎを追に行つた子等 隆子  
 一望千里山また山白づくし 敏子  
 冬山へ紅一点黒眼鏡 三十四  
 冬山に春待つ命また一つ 藤持  
 親の気も知らず冬山への挑戦 明春  
 冬山の厳しさ刻んで来た男 綾女  
 冬山の生還テレビも起き上り かつみ  
 寄らば切る構えを見せて冬の山 右近  
 冬山をしとねに春を待つ遺体 香珠夫  
 頂上で朝日を受けて雪が燃え 魚山  
 冬山の恐さを告げる遭難碑 松花  
 千里から冬金剛にかかりけり 一風  
 冬山へ母に抱かれる如く入る バット  
 冬山の山男が何か捨てに来る 里風  
 冬山が好きなどこだけ親不孝 一郎  
 初雪にご機嫌連峰陽に映える 軒太楼  
 冬山の恐怖が母の胸に棲み 宵明  
 俗人は来るなど吼える冬の山 国彦

除夜の鐘

地 天

冬山を語る男に指が欠け 洋々  
 冬山へ僕のドラマがよじのぼり 千翁

村上春巳選

洋上で聞く除夜の鐘寂しすぎ 伊津志  
 除夜の鐘道行く音も改まり かつみ  
 それぞれに音色が違う古都の除夜 悠泉  
 くる年の不安を孕む除夜の鐘 軒太楼  
 金策のヘタルへ除夜の鐘が鳴り 洋々  
 小さな義理も果し除夜の鐘を聞く 三十四  
 除夜の鐘を撞く老僧般若湯あつい 踏草  
 救急車のラジオで鳴ってる除夜の鐘 道子  
 ハイミスへ又味気ない除夜の鐘 思月  
 除夜の鐘健康で聞けたらなーと思ひ 季賀  
 除夜の鐘不況はまだまだ続きそう 素身郎  
 仕納めの夫婦喧嘩へ除夜の鐘 一風  
 除夜の鐘嫁きゆく子に酌をされ 翁童  
 嫁がせてたつた二人の除夜の鐘 どんたく  
 猫抱いて老婆が聞く除夜の鐘 肖二  
 昨日の俺がかえられようか除夜の鐘 不二  
 除夜の鐘余韻の中へ手打ちそば 福水

出稼ぎの父に抱かれて除夜の鐘 木魚

老骨に響いて除夜の鐘寒い 正彰

百八ツの煩惱釈迦は多情なり 無人

撞く僧の素足に明ける除夜の鐘 白水

除夜の鐘七十一回目 出会い 福水

除夜の鐘どうやら熱はひきました 素身郎

齡ひとつ返したくなる除夜の鐘 登美也

金融倒産すれすれ除夜の鐘をさく 宵明

忘れたい一つひとつの除夜の鐘 カズエ

過疎の火が又一つ消え除夜の鐘 富江

寄せた金散ったところで除夜の鐘 香珠夫

除夜の鐘下界に聞いて 山男 本蔭樺

黙々とただ黙々と除夜の鐘 本蔭樺

除夜の鐘今年を流すしまい 風呂 万作

除夜の鐘数える風呂の湯があふれ 好一

除夜の鐘聞きつつ初春の髪となる 宵明

一年の起伏黙して除夜を聞く 代仕男

四捨五入まあまあ年の除夜の鐘 竹馬

除夜の鐘母念仏で間をつなぎ batt

除夜の鐘聞きつつ出馬も考える 茶人

みんな無事手許にもどる除夜の鐘 たもつ

ゆっくりと身構えて聞く除夜の鐘 千翁

除夜の鐘妻よ盃あげ給え 七面山

軸

四十五歳の重みへ除夜の鐘

人 権

中村ゆきを選

人権を主張小づかいられるまで 不二

人権が一人ごねて立ち退かず 豊生

産声にはや人権を詩いあげ 静泉

人権の尊厳唯物論からは出ず 松花

人権へお上の仕事はかどらず 本蔭樺

人権の殻をかぶって働かず 白水

人権は調停室に来てしまひ 木魚

人権を無視された子の黙秘権 暁明

人権は目に見えぬもの護られて 静枝

人権の結論金を呉れと云い 一風

底辺にいて人権を忘れられ 与史

人権がどうのと隣とまずいこと 里風

人権を護る六法ひいてみる 福水

人権の主張幸福感と別 一郎

独房にいて人権をわめきたて 英詩

問題にすると人権暴れ出し batt

封切らず机の上へそっとおく 敏

追突しても人権いたわられ 国彦

人権を無視し合ってる相談所 祥月

表面に出れば人権波紋描き 正彰

人権尊重国民性を狂わせる 春日

人権がなんだ明治の癩に触れ 茶人

十九才少年Aで甘やかし みのる

親孝行しろとは人権無視の言 七面山

雨つづき人権うたう釜カ崎 たもつ

吹き溜り生きる権利を見失ひ 富江

人権論さみしく聞いた老一人 重人

人権を声高に云う不仕合せ 真祐

では私の人権はと問う警察官 漫柳

どたん場の反抗人権を盾とする 好一

人権がどうのこうのと喧ましい 綾女

生徒会小さな人権話し合い 万作

法にない人権化し野へ詣らせる 弘生

人権を逆手にとつてみとうなり 古方

人権の過保護何んにもさせぬ事 俗人

人権を云わぬ販売機を使い どんたく

人権で迫れば因果を持ち出され 無人

人権はもういらぬ妻の尻重し 苦句

人権論女工哀史の摒くずす 弘生

人権へ対話の風が温かい 千翁

もたせてもっている人権やとわかり 古方

人権は夫の愛に埋没す 素身郎

人権の講義婦人学級から帰り カズエ

黙々と母人権の外にいる 白水

天

# 初歩教室

題「野」

本田恵二朗

自句自解は、自己宣伝になりそうな気がして、いささか気が引けるが、当教室では一つの参考となるかも知れないので、敢てやってみることにする。二年前に、妻の両親の墓を建立して『松籟に抱かれて安らかな眠り』の一句をものして彫り込んだが、二た抱えもある松の太木が墓地の屋根を形成してくれている。四季を通じてさわやかな松籟を奏で続けてくれる松である。その松の落し子が、その根のあたりに一つ二つ小さな葉を見せて芽はえているのを老妻が見つけたのである。三才児の足に踏まれてもつぶれてしまうほどの葉が薄緑色に弱々しい。親松があまりにも大きくて日光とは全く無縁のようにさえ見える。可愛そうだなと老妻と話し合ったものだが、よく見ると案外に力がありそうにも見える。墓地という聖域のせいか私は静寂な心境にひたっていたことである。私の诗情は動かすにはいない。太陽のめぐみの大きく公平さをはじめと感じたばかりか、み仏の心さえほの

ぼのと感じたことである。太陽の心を全人類が持ち合ったなら世界平和はたちどころに完成するのではなからうかなどと思いつたりする。太陽の心を心とするまでには至らぬとしても、それに一歩でも近づきたいものだと願う心を両親の墓地で発見したことを併せて思つて生れた句が次の一句である。

『一と粒の種太陽は見逃がさず』

△

野仏に野菊を誰か夕焼ける

みどり

(野仏に誰れがあげたか菊薫る)

同

押しきられわが家の野覚がわゆくて

同

(無理を押すわが家の野覚にくめな)

静枝

野の草と見くびられしを根で生き

同

(野草と笑わば笑え土根性で生き)

同

花野ゆく若さを偲び夢たぐる

同

(若き日の夢たぐりつつ花野ゆく)

翁童

野の花をつみし一日の安らぎよ

同

(安らぎの一日すらと野花摘む)

同

野に咲いた花美しくもたくまじ

同

(野に育ち美事に咲いたたくまじ)

紫安

山路ふと野仏見つけ山路を合せ

同

(野仏に出会つた山路の歩が軽い)

本蔭樺

野暮でよしどうせ農土で終る身は

同

(野暮でよし土に生きよう土に生き)

同

国会の野次も僕らと大差なし

同

(国会の野次選良の声でなし)

度

野草の緑うれしく革靴脱いでみる

同

(靴脱いで野草を踏めばこころ満つ)

陽山

広野原次々アパート建ててゆき

同

(団地また団地が野原を食いつぶす)

小川の流れ野花ゆれつつ覗きつつ  
(野菊たち小川をそっと覗きこみ)  
野放しの自由心の中のみ

(野放しの自由を心であたためる)  
月天に裾野は白き花すすき

(月明り裾野に踊る枯すすき)  
思い出へ記憶の地図の野を探す

(思い出の野が地図に無い世の移り)  
野暮でいいそれが私の個性なり

野遊びの話を手には不思議がり  
野や丘がまだ残っていた汽車の窓

野の仏亡夫に似てて飢供え  
(亡夫に似た野仏さまにふと出会い)

冬の野は枯れるにまかせ白すすき  
(白すすき枯野いよいよ寒うする)

野心捨ててからすべてに角がとれ  
(野心を捨てたら角がとれ角がとれ)

野仏の鼻欠けたまま笑みたたえ  
(鼻欠けた野仏さまと笑みかわす)

童謡の靴の鳴るよな野道ゆくと  
(野道ゆくくと童心をわたる雨)

くにさきの旅に野面をわたる雨  
(旅は佳し野面をわたる雨も佳し)

山波の径に野分けの詩がある  
わが視野におつて欲しいと娘を思い

野暮な人と思えど女の性が惚れ  
(野暮くさい人ねとぞこん惚れている)

野心家はとかく名士を知りたがり  
野立の席浮世はなれた茶の香り

(野立の座しばし浮世を忘れさせ)  
野草刈る農夫入日が追いたてる

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

(野草刈る鎌が去る陽追いかける)  
 小菊野をはなれてしほむ外はなし  
 道問うた野良着の顔が母に似る  
 野良犬の目にもうさんな千鳥足  
 市場籠男が持てば野暮に見え  
 介抱は下戸にまかせて野暮に見え  
 田を売った金で野菜を買う身分  
 秋の野はすすきが我がもの顔でいる  
 (野草の合唱すすきがタクト振っている)  
 また事故か野井戸に人がたかっている  
 (いたましさまたも野井戸が取り巻かれ)  
 深夜の火事どこから来たのか野次野次馬  
 (深夜火事バシヤマの野次を浮き上げる)  
 目の前の野良へ車でご出勤

宗 義 同 慶 彦 同 利 美 同 美 子 繁 子 生 仏 瀧 水 満津子

(世の移り車で野良へご出勤)  
 草野球野次が飛び交う味がある  
 (ユイモラスな野次が楽しい草野球)  
 (方言の野次が飛び交う草野球)  
 (野次られてあがつてしもた草野球)  
 火を囲み歌う野営にタンバリン  
 (野営の火原も歌声も上げる)  
 秋深し山も野原も冬支度  
 (冬支度せねばと野山話し合い)  
 犬連れて秋の野面へ試歩の朝  
 (試歩の靴秋野を犬に引っぱられ)  
 野のすみれ小さく咲いて草のかけ  
 (草かげに咲く野すみれの美に引かれ)  
 落柿を野仏に供え手を合す  
 (野仏に落柿供え話しかけ)  
 ますえ

駒 子 喜 洸 秀 村 三十四 喜代子 ますえ

### 雅号ぶつちやけばなし

こうどう



あんべいじ

安平次弘道

(135)

昭和29年11月菊薫る秋晴れの日曜日の午後、川雑の紹介で宇部句会に始めて出席した時のことである。川柳を始めたばかりで句会の様子も判らず部屋の隅に小さくなっていた。やがて選も終って披露になった。次々に入選句が読上げられ作者が雅号を名乗られる。私は先輩の句を感心しながら聞きいていた。選者の声が一段と高くなって天の句が読上げられた。私の句だ。鼓動が急に激しくなり声が出ない。雅号もないしどうしようかと思つたが、とっさに本名を読替えて「弘道」と名乗った。感激のうちに生れた雅号である。

(会社員・四十六歳)

野に咲いてこそ七草に数えられ  
 道遠し野末の煙ほそぼそと  
 (道はるか野辺にはほそぼそ煙たつ)  
 帰休する傷心野良着が待っている  
 (Uターンを迎える野良着縫うて待つ)  
 野に放てば味方に不利くさり解かず  
 (野におけば牙をむきそう継いどき)  
 心得ぬ身にも野点の羨し  
 (心得ぬ野立ながらも心澄む)  
 患者さんが抱え込んだ野氣かな  
 (野の匂いしみたクランケの素朴な目)  
 野良犬に世話好き知られ居つかれる  
 (大好きだなと野良犬に居つかれる)  
 曼珠沙華野地蔵の顔引き立たせ  
 (野仏を美男に見せる曼珠沙華)  
 筋通してもやっぱり野党です  
 (野党あわれ筋通しても通しても)  
 野仏は芒ばやしに見えかくれ  
 (野仏さま芒の波に浮き沈み)  
 せめて視野広くする氣の徒歩旅行  
 歳費値上げしてから与野党すれ違い  
 お百度へ野仏さまは無表情  
 野仏さま極楽道はどっちです  
 じつと耐えるよと野菊に教えられ  
 嘘いわぬ野菊に今日も秋の風  
 (嘘いわぬ野菊へ秋の冷えまさる)

茂 美 同 軒 太 倭 幸 生 静 観 堂 比 呂 路 明 春 重 人 正 則 保 夫 かつみ 藤 持 静 子 道 史 篤 史

題一風一十二月二十日締切(二月号発表)

宛先 倉敷市下津井一―九―三四七二一

本田恵二朗

「ひらめき」

入選発表

選者 川村好郎  
投句総数 四百七十三句  
入選 五十七句

ひらめいて一気呵成の絵筆持つ

石橋を叩けばひらめき逃げてゆき

瞑想のひらめき妖精の誘いとも

ひらめきが小走りにさす暗い道

ひらめきが欲しいドソ底の設計図

ひらめきをまさかと思う目をつむ

ひらめいた野心笑いを見せている

アドバイスされてひらめく善後策

突然の嘘がひらめく電話口

つまらないことにひらめく妻の勘

ひらめいた出先でさがす赤電話

ひらめきで切れる別れる占師

ひらめきの恋とは呼ばんものを抱く  
大 阪 凡 九 郎  
ひらめきのまま五線譜が満ちてく  
堺 天 笑  
ひらめいた女の勘の哀しさよ  
和 歌 山 マ サ 子  
ひらめいたアイデア敵に突き指した  
大 阪 鎮 彦  
リング落ちて凡人はひらめかず  
大 阪 十 止 庵  
ひらめきを信じもだえる日が続き  
豊 岡 桃 里  
稲妻がひらめく君と別れる夜  
松 江 晃 男  
ひらめきの鈍い女房で恙なし  
宝 塚 静 馬  
過去は過去ひらめく国旗平和なら  
神 戸 静 泉  
あげ足を取るひらめきは別に持ち  
倉 吉 弘 朗  
朝になればひらめきの色あせる  
岡 山 翁 童

真沙子  
ひらめきが異目々々と出てる無事  
ひらめいた句想ラッシュに揉み消され  
大 阪 柳 宏 子  
差し迫る不況対策ひらめかず  
ひらめきヘタタイムチャイムの待つたなし  
大 阪 儀 一  
ひらめきを待てば焦りが返ってき  
ひらめきがこぼれそう胸をしかと抱く  
大 阪 凡 子  
ひらめきへ別な私が炎えている  
富 田 林 花 梢  
ひらめきに変えたわたしの人生譜  
ひらめきについて行けない日の焦り  
富 田 林 維 久 子  
ひらめいた嘘にどたん場救われる  
八 尾 夕 花  
ひらめいたとこへ電話のベルが鳴り  
八 尾 夕 花  
ひらめいた日から虜になった恋  
自分とは違う匂いに妻の勘  
大 阪 文 秋  
ひらめきを賭ける男のコップ酒  
八 尾 弥 生  
ひらめきどおり噂の人と添うている  
八 尾 弥 生  
呼び出しの謎へひらめく軽い足  
ひらめいたはずの馬券を踏んで去る  
和 歌 山 富 江  
に  
和 歌 山 富 江  
ひらめきを女の愚痴にする夫  
鈍感な私にひらめく嫉妬心  
和 歌 山 万 作

大洲 眺 明  
凡人のひらめき開運につながらず  
ひらめきを脚で稼いだ老刑事  
大 田 軒 太 楼  
ひらめきを暖めすぎて機を失し  
信号が変わってひらめきが消える  
倉 敷 素 身 郎  
佳 句  
ひらめきがストップタバコの輪と遊ぶ  
具 塚 つ き 子  
凡人のひらめきあくびして忘れ  
大 阪 十 止 庵  
女のひらめき成りゆきにまかされ

営業所  
阿倍野店  
堺吉野店  
住野店  
平野店  
都島店  
今福店  
十三店  
九条店  
尾尾店  
良いよい  
買いいい  
月賦百貨店  
crcdit system  
丸越  
大阪市阿倍野筋3-15-1  
T E L 632-3806・3807

ず	八尾 弥生	一三	梁水	一三・五	倉敷
ひらめきをたぐる嫉妬のはてしなく	兵庫 可住	一四	吸江	一三・五	藤井寺
凡人のひらめき硝子のかけらです	倉敷 春日	一五	柳宏子	一三・〇	大阪
人ノ句	倉敷 春日	一六	暁明	二二・五	大洲
ひらめきがびっくりするよな声になり	大阪 柳宏子	一七	重人	一三・五	松原
地ノ句	大阪 柳宏子	一八	どんたく	二二・〇	神戸
ひらめきを言葉に出せば逃げそう	和歌山 太茂津	一九	千代香	一一・〇	岡山
天ノ句	和歌山 太茂津	二〇	富江	一一・〇	和歌山
ひらめきを拡げる腕を組んだまま	大阪 凡九郎	二一	一舟	一〇・五	大阪
選者吟	大阪 凡九郎	二二	維久子	一〇・〇	富田林
ひらめきをかかし血色ほめて去に		二三	あいき	一〇・〇	大阪

昭和四十九年度

ベストテン (十月現在)

一	花梢	二〇・五	富田林
二	十止庵	二〇・五	大阪
三	天笑	一九・〇	堺
四	弥生	一七・〇	八尾
五	柳志	一六・五	大阪
六	静馬	一五・〇	宝塚
七	凡九郎	一四・五	今治
八	宵明	一四・五	神戸
九	静泉	一四・五	大阪
一〇	文秋	一四・〇	貝塚
一一	つき子	一三・五	兵庫
一二	可住		

昭和五十年第一回

「扉」五句以内

第二回

「タイミング」五句以内

縮切 一月二十日

投句先

〒593 堺市堀上緑町一の三の七

藤井一二三方 大萬川柳係

大萬川柳会の会則

一、本会は川柳に趣味を持たれる全国の同好者に広く呼びかけ、その技その覇を競い、柳界の向上発展と柳人相互の親睦を図るをもって目的とする。  
二、毎月の出題並びに選は川村好郎が担当し、投句は一人五句以内、用紙は官製ハガキ。選句は

公平を期し、投句の到着順に一句毎に句箋に清記し、無記名のまま一連番号を附記し、順次混ぜ変えて選者に渡し、選句する。  
三、毎月二十日縮切、出題及び入選発表は毎月川柳塔誌上に掲載される。  
四、左記の採点法により月々の得点を加算し順位を定め、毎月のベストテンを発表する。同点の場合はその月の投句先着順とする。天位四点、地位三点、人位二点、佳句一・五、平抜き一点。

五、毎年十二月縮切分から翌十一月縮切分までを一年度として、年度間の総合点の成績順位を定め、年度ベストテン把持者に賞品を贈呈し、大会の選者に推薦親宴に招待す。なおベストテン第一位には梅里賞をもって表彰する。  
六、本会の大会は毎年二月に開催する。本会の会費及び投句料は不要。但し大会の会費等は別に定む。  
七、投句其他の連絡先は藤井一二三方大萬川柳会係へ。

▼前号訂正—P51の一分間の柳論は恒松町紅氏。  
▼同人総会出席者P47に河村日満氏が脱落。ともにおわびします。  
▼二賞発表句会の無鬼氏選天位「天と地の和合へ栗の実がはじけ」と久米雄氏選「酒豪今日敬遠されてるのに気付き」は臼井三林坊氏作でした。  
▼P39「辞世の句」を「旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる」と訂正。

黄銅六角ボールトナット  
及び特殊換物全般

合資会社  
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地  
TEL 誠 三四五二一四  
夜間 〇四四〇八

## ・柳界展望・



写真説明・前列左から東野大八氏、小川静観堂氏、後列左から三井静夢さん、橋高薫氏。(カメラ番人氏)

▼弓削川柳社発行の川柳紋士10月号は西日本川柳大会号。(水粉千翁氏の表紙は相変らずお見事の一言につき) 会長浜野奇童氏は巻頭に「前略―霞乃先生をお迎えすることができました。川柳塔の生々庵、菜、一三夫さんたちにも随分お骨折りをいただきました。」(後略) 生々庵主幹の「路郎師書録」は「川柳雑誌大正十五年一月号」に記載されたものである。

▼49年度ふあうすと年間賞の「ふあうすと賞」は同人作品。「紋太賞」は誌友となった。対象作品は49年1月号〜12月号から5作提出。締切は50年1月15日。宛先はふあうすと川柳社。

▼ねぶた10月号は昭和四十八年度青森県川柳社「馬奮賞」の米谷不落氏と、青森県川柳年度賞の長谷川愛子さんを発表。

▼服部明陽軒氏(大阪市)の川柳第二句集「宗右衛門町」が49年10月発行。永年ミナミで「名物金鍋」として知られた明陽軒店主だけに花街の句には他の追隨をゆるさぬものがある。(非売品)

▼東野大八氏(美濃加茂市)は10月20日の八尾市文化祭市民川柳大会へ出席、当夜は香川の三井静夢さんや板尾岳人氏と新築の薫風氏宅で一泊。翌日は伊丹の小川静観堂氏宅を訪問、三十六年ぶりの対面をされた。(カットの写真) 11月4日には九州への途次、来阪され一三夫氏と欲談三時間、文筆業の気エンやら哀愁? をこもこも、ミナミからキタへ語りつづけられた。

▼第12回三重県川柳大会が50年1月12日、津市新町一の洞津会館で開催。雑誌は堀豊次選、欠席出句は認めぬとのこと。〒516伊勢市八日市場町四―二(事務局・橋本征一路)

▼金子呑風氏(上田市)から一句集「川柳塔」まだ全部まで読みおわりません、素晴らしい作品があるためです。―石油をどう使おうか秋ふかし―呑風。

▼藤原時化緒氏(川柳黒潮社)から井上剣花坊先生の句碑の写真を拝受。―松陰句碑の写真を拝受―川柳塔

▼池口呑歩氏(東京都)若松川柳会が11月11日、13日呑歩氏を迎える会をもち、その寄せ書を拝受。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)岐阜の鵜飼は例年に比し今年は収入が意外にあつたとのこと。

▼西尾栞氏(八尾市) 10月の八尾文化祭川柳大会の出席者が3ケタになったとよろこんでおられた。

▼川村好郎氏(高石市)は「最近では講演ばかりお声がかかる」と。どこの大会でも氏の柳話は好評である。

▼尼録之助氏(出雲市)は島根県の公募川柳を柴田午朗氏、木村三雷波氏らと共に選がきまつたとのこと。沖繩へ出かけた相変らず多忙です。

▼新潟回天子氏(唐津市)同市に於ける川柳展が11月24日に開かれたが、今回は氏のものだけを展示された由。

▼河村日満氏(鳥取市)路郎先生時代にはスベリスのつらぬ支部が一番有難いと言っておられたが、スベリスをよこせせという会もあって編集も大変ですね。

▼藤井明朝氏(島根県)と岡崎祥月氏(松江市)の川柳塔社十周年記念表彰祝賀川柳会が10月20日に開かれ、本社同人多数出席の寄せ書きを拝受。公用多忙、実家への死去、県大会の招待作家と手紙書くヒマもないと、びりぐせの多忙ほんとに飛び回り。明朝。

▼直原七面山氏(岡山県)

は10月29日來社、生々庵主幹や一三夫氏の不在で葉子さんと一時間ばかりの欲談で帰岡された。

▼吉岡通児氏(松江市)は句会の寄せ書きに、つき子さんや不朽氏の巻頭句を斬ったとのこと。見男、孤呂二、祥月、鶴丸、町紅諸氏の名が見える。

▼堀江芳子さん(島根県)から「近頃はほとんどご飯を残さなくなりました。正朗の句の清記を槻谷一葉さんや榊原秀子さんのお世話になり助かりますと。」

どこにもない味

ヒロタ

栄業の王様

シユ-ケ-ラム

HIROTA

▼山田季賛氏（高槻市）も入院中とは思えぬほど作句力旺盛である。ともに一日も早く退院されることを祈ります。

## 新 同 人 紹 介

▼村山光輪氏（大阪市）の長女慶子さんは11月3日天満宮会館で大河俊彦氏と結婚。お祝い申し上げます。

▼梅路庵不酔氏（姫路市）

津 田 与 志

吉 野 富 江

田 中 万 作

若 宮 武 雄

井 上 マ サ 子

内 芝 と し よ

小 川 佐 知 子

以上「好郎・太茂津・推薦

から編集部へ金一封拝受。▼阪上止庵氏（大阪市）から不二田一三夫氏の新聞西新聞の読み切り小説拝読。短詩型文学界のあったような、なかったような話ですが、ひやひやするようないないような人もいるようですね。

▼清水一保氏（鳥取県）から、東伯町が誇る菊花展を皆さんにお見せしたいと。

▼光好陽子さん（岡山市）の夫君照太氏（三四詩）が10月12日長い闘病生活から永眠された由、謹悼。  
▼藤岡花梢さん、和田維久子さん（富田林市）から旅信。残念ながら本社会会を欠席して東北に来ています。花梢。花巻温泉と紅葉を満喫しております。維久子。

▼岩田美代さん（富田林市）は浜松から「たまには句をはなれたる旅もよいものです。」  
▼越智一水氏（今治市）は阿波かずら橋から「四国郵政川柳人が集り「親睦と川

柳を語る会」を開催。| かつら橋恋をつなぎ手をつなぎ一水。

### ▽12月の句会△

▼堺川柳会は十三日。題は「走る・闘・兎・末」会場、八木摩太郎居。  
▼南海川柳会は十九日。題は「苦情・幸抱・裏目」会場は南海電鉄本社食堂内。  
▼南大阪川柳会は二十日午後六時から。題「天使・先輩・独古・壁」会場は松崎町三丁目大萬。  
▼川柳東大阪は二十八日六時から。題「くくる・帰省・無理・暮」会場は東大阪市中中央公民館第二集會室。

日本川柳協会創立総会が十二月一日開催。会場は名古屋観光会館。出席資格は「日川協準」へ規定の申込みをした柳社、川柳団体、会の責任者、主宰者となっている。詳細は〒530 大阪市北区宗是町一丁目ビル608 片山法律事務所内（日川協準）へお問い合わせください。  
日本川柳協会創立準備委員の中には川柳塔社主幹中島生々庵氏も名を連ねられておられる。

**何を選んでいただくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのにも心に**

**くい贈物かと存じます**

一〇〇円から  
一〇〇〇〇円迄  
大阪・東京・京都  
3店に共通です



高島屋

大阪 東京 京都

# 本社十一月旬会

会場 以和貴荘

七日 午後六時

さわやかな秋、にぎやかな会場。快調に盛會がつづく。

今月は「川柳わかやま」の太茂津御大が新同人の沢山福水氏をはじめ、田中万作、津田与史、吉野富江のみなさんと共に出席。また他社の方々も友情出席と句会を盛り立ててくださる。お礼申しあげます。

さて柳話は、この人、阿部柳太氏のいつも愉快なお話。声量はあるし、テーマは川柳的とあって、笑いの渦がここかしこに巻きあがる。今月ほもと雇っていた落語的なのそつかしい春男という人の失敗談から、六代目菊五郎や長谷川伸先生を登場させ、たっぶり20分は氏のペースにはまり込んだ。

月間賞杯は中川滋雀氏にかがやいた。

(進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊)

出席―鶴声・たかし・川狂子・多久志・天笑・敏・与呂志・文秋・柳宏子・葛城・花梢・柳志・素郎・千万子・柳太・滋雀・喜風・古方・薫風・いわを・維久子・肖二・綾女・一三夫・一舟・好一・鎮彦・静馬・美幸・喜美子・太茂津・福水・万作・富江・幸生・誓

二・生々庵・勝晴・形水・百酒・正彰・以兆  
・鬼遊・小松園・南柳・柳信・あいき・弥生  
・重人・醉々・儀一・三十四・水京・牧人・夕花・吸江・榮・眉水・与史・清女・瓢太・十止庵・好郎・清人・岳人・雀踊子・凡九郎・史好・庸佑・葉子。

席題「湯ぼてり」

野村太茂津選

情熱の果ての湯ぼてりとは見えぬ腹の児が動く湯ぼてりのひとり言  
湯ぼてりに忘れた疵がまたうずく  
湯ぼてりの鏡の私に話しかけ  
湯ぼてりの妻の裸へ目をそむけ  
湯ぼてりの時は女にある魅力  
湯ぼてりの不満ビールが遅すぎる  
混浴の刺激が強い湯のほてり  
湯のほてりやはりはり男の想念か  
ハネムーン湯ぼてりだけではない赤さ  
湯ぼてりに女の業がふとよぎり  
湯ぼてりでスリルを買いに宿を出る  
湯ぼてりがあなたと呼んでみたい初夜  
湯ぼてりの肌にあやしくして誘う  
湯ぼてりの寝化粧醜くして誘う  
湯ぼてりの肌の匂いが差し向う  
気兼ねなく湯ぼてり同士国訛り  
湯のほてり女ごころを狂わせる  
湯ぼてりの妻悪女には見えぬ  
湯ぼてりの肌へ金婚一寸燃え  
湯ぼてりの妻の若さに湧く妬心  
値上りをしたただけ湯ぼてりして帰る  
万作

★ 11月旬会終了後、運営委員という部門設置と、または編集部強化のための会議がおこなわれた。P.59参照。(敬称略)  
出席―中島生々庵・若本多久志・西尾榮・川村好郎・菊沢小松園・大坂形水・不二田一三夫。

★

湯ぼてりの女どうしは胸を開け  
湯ぼてりの妻に若さがまだ残り  
湯ぼてりでばれてしまった盗み酒  
湯ぼてりの目にちやぶ台のビール瓶  
絶景の秋湯ぼてりのひとり旅  
湯ぼてりを包む浴衣へ旅の風  
湯ぼてりに小さな浮気の下駄を履く  
灯を消して湯ぼてり二人冷まし合い

席題「返事」

久保田以兆選

どうにでも返事とる気の切手入れ  
黙秘権もう知っている三才児  
一生に一度下手な返事をしてしまい  
返事来るまでは望みは捨ててしま  
メガホンへの返事は高く手を振って  
あっさりと返った返事があわてさせ  
うっかりと留守が返事をしてしま  
生返事チップの額に気がつかず  
機嫌よい返事交している新婚  
母にさえハイと言えない事もあり  
OKを延ばすも恋のテクニク  
物干して大きな返事秋日和  
怒髪天返事代りに置く受話器





信心をすれど本能断ち切れず 葛城  
 信心という名で闇がりに起される 小松園  
 親友も信心だけは別のもの 千万子  
 信心の眼から人間善に見える 喜風  
 信心の話題はさけたおつき合ひ 吸江  
 本堂を磨いて信者の心満ち 正彰  
 きれいな妓が願かけて行く法善寺 誓二  
 信心と別に写経の墨をする 富江  
 信心に凝って人生くたびれる 花梢  
 信心のころ運の花からもらい 悦郎  
 信心を忘れ尼僧に見とれてる 醉々  
 信心の強さ貧乏してたかて 素郎  
 信心とは別におみくじひいてみる 柳宏子  
 信心が友の非行をおしとどめ 水京  
 信心を金で買う気の寄進札 柳志

## 社告

川柳塔社発展のため、新しく運営委員  
 と編集部員を左の諸氏にお願いすること  
 になりました。(順不同・敬称略)

**運営委員**—中島生々庵・若本多久志・  
 西尾栄・川村好郎・菊沢小松園・大坂形  
 水・傍島静馬・西田柳宏子・金井文秋・  
 阿部柳太・島居百蕉・野村太茂津。  
**編集部員**—橋高薫風・戸田古方・児島  
 与呂志・河井庸佑・有信新之助・谷垣史  
 好・河内天笑・板屋岳人・山本素郎・高  
 杉鬼遊・香川酔々・不二田一三夫。

昭和49年11月7日

川柳塔社

朝詣り遠者な祖母でいてくれる 柳宏子  
 信心でない札所巡りのバスに乗り 形水  
 信心が取り持つ縁で玉の輿 福水  
 信心の潤にきたない欲を持ち 十止庵  
 手後れの病氣と知らず踏む百度 維久子  
 迷信と言われても未だ信じきり 水京  
 狂信の果れは一家の和を乱す 綾女  
 信心が家庭の平和取りもどす 綾女  
 信心をすすめた人が先に逝き 史好  
 信心も良いが医者もてあまし 柳太  
 信心の深さへ迷い寄せつけず 弥生  
 ヨホヨボになって信心凝りはじめ 一三夫  
 信心と別に医薬にしがみつ 多志  
 夫婦別してまで信心すめに 史秋  
 セールスのように信心すめに 文好  
 信心に見切りをつけて医者へ行き 天笑  
 信心の母の言葉は生きていた 千馬  
 がめつさは仏に帰依せし人ならず 静馬

### 兼題「貫録」

西尾

葉選

貫録を女は装身具に頼り 章雅  
 貫録が良すぎて秘書役にむかかず 弘生  
 貫録に守衛は過去をのぞかせず どんたく  
 貫録にそなわっている人間味 祥月  
 可可笑する貫録へ座が和み 宗義  
 貫録は名刺に力借りている 柳信  
 貫録に貫録つける床柱 一栄  
 大輪が貫録見せる菊花展 季贊  
 貫録と別に支持率低下する 登美也  
 貫録はないが父ちゃんいい父ちゃん 喜美子  
 ビール腹ですと貫録が言わせない 凡九郎

貫録を秘書の美貌が引き立たせ 儀一  
 貫録 充分 耳の遠い人 生々庵  
 貫録があっても妻には弱いなり 悦郎  
 現金へその貫録の脆かりき 清人  
 遅い目に出席すると妻が貫録か 静馬  
 貫録は無口に限ると妻の知恵 勝々庵  
 貫録の社長会社は火の車 勝晴  
 金脈があるので貫録出来てくる 以兆  
 正面に坐った祖母にある余裕 柳宏子  
 貫録も座頭というドサ回わり 一三夫  
 貫録がついて敬遠されはじめ 吸江  
 貫録はないが高額納税者 花梢  
 貫録も今宵おんなへ喋りすぎ 鬼遊  
 貫録は元少将であらせられ 史好  
 貫録のないが大口ボンと出し 清女  
 貫録が小銭だけとは見抜かせず 柳信  
 貫録が無言を言わさず手を引かせ 文秋  
 貫録と貫録かけ引きの応接間 多久志  
 貫録に女心が引っかかり 清女  
 貫録が幼な馴染へ距離つくる 万作  
 貫録は心の糧が出来た時 川狂子  
 貫録に酔うて見上げる盧舎那仏 川々  
 ライバルへ貫録違いを知る悟り 富江  
 貫録は銀座に店を出したママ 薫風  
 貫録ともてはやされてから 富江  
 貫録に押切られてる初対面 柳志  
 貫録の違う握手をして貰い 天笑  
 墨をする父の貫録まだ老い 夕花  
 貫録の笑みを湛えたデスマスク 滋雀  
 貫録は血圧言うて先に去に 栗

(河井庸佑整理)

# 各地のつづき

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

## 川柳しんぐう

大矢 十郎報

つなぐれた鎖をくるくる巻く焦り

くるくると話題を変える話好き

遠筆の横が来ているサイン帳

のみ連れが来ているサインとは知らず

Vサインばかり投票日、明日

腹立てばドタバタ歩くせがあり

ドタバタとあらかた過ぎた世を惜しむ

土に耐え土で楽しみ土となる

炎天の土工の汗が陽をはじく

土を撫で土をたいた老の指

針の手を止めて身重の娘を思い

針をさす言葉へ針をさしてやる

釣針はねる命がすきとすり

耳よりな話も金が先に立つ

耳かきが愛を奏でる膝枕

耳うちへ青ざめて立つ使い込み

朝顔の土も買わねば団地族

## 南大阪川柳会

金井 文秋報

微笑には微笑いもの朝の駅

逢うてきた余熱さめてない微笑

微笑したままでうなづく良い話

参観の母の微笑は満ち足りる

武子

千寿子

よしほ

凡九郎

まさ子

まさ子

里美

としよ

大輪

三千代

入道

とよ子

豊桶子

豊水

縁堂

十郎

操

滋報

好郎

綾女

正彰

社内ではばくの微笑ですれ違い  
燃えるもの燃えさせ微笑それつきり  
半泣きの夢で捜した青い鳥

一一〇番半泣きの声聞くとれず  
半泣きの顔が待ってる母の留守

半泣きの顔で子供の口ごたえ  
禁煙の決意へライターの御中元

ライターのライターつので尚かなし  
遺品のライターに話題のつぎ穂を聞いている

占いは吉大胆になってみる  
人並にとかく腹だけは立てる

人並にそれはいんだ子沢山  
人並の姿に母の眼はうるむ

人並みに対話が出来る耳が欲し  
段取が狂えばおもしろいほどあわて

あわてた証抱弁当箸がない  
いずも川柳会

発車ベル母の笑顔が消えた窓  
よく見れば団地の窓に見る個性

窓越しに月も見舞っているベッド  
親馬鹿で育てた子にも逃げられる

逃げ道がこんなにあつた王手飛車  
久しぶりが登つた山におじきする

糸電話童心交わした頃を恋い  
糸電話をそばでつけてる電話口

電話ではすまぬ無心に最敬礼  
マダムから電話ウウンウンで切り

気のもめる距離を忘れた長電話  
赤とんぼ逃げる窓から明日も晴れ

老けたならと相手も思う久しぶり  
いろはから電話の謙虚な久し振り

つまみ喰い電話のペナルに慌てたり  
奇形魚を逃して末を不安がり

菜の花句会

台風よ父母の住む地をさけて吹け

儀一

恒明

肖二

十庵

好彦

鎮彦

あいき

頂留子

智梢

千九郎

凡九郎

君風

静香

古方

文秋

草丘報

板垣

草丘報

正子

青湖

郁生

苑花

利紀

雅姫

晴月

芳正

緑之助

糸紅

由喜江

義実

独仙

美幸報

敏

ゆううつな心へ翳雲が出る  
物書きの端つばに居て食えている  
写経する自我一つずつ消す如く

翳雲青年の愛雲せて飛び  
台風が来ると云うのに釣支度

一人暮の夫の背に老を見る  
ここという石はピシリと音をたて

角行道をあけてライター借してんか  
寝返りの駒が先頭で攻めてくる

長考の石の重さを知つた指  
歩兵一個持って名人よゆうあり

辞表書く机の上に塵もなし  
単細胞さしずめ俺は香車かも

さんま食う女の唇が紅ずきる  
夢を書く日記余白を残さない

木犀へさんまの煙り追い出され  
いわし雲地平線まで海しずか

缶詰にされてさんまの詩が消え  
空耳で台風予報聞く間借り

岸和田川柳会

植山 武助報

気いらぬ語を耳に爪を切り  
切る切らぬと騒いだ嫁にぞてもらい

せせらぎの音をききつつ露天風呂  
人工呼吸かすかに胸の音を聞き

祭り絆天着ればわが街よいところ  
ふるさはは黒アルバムを見る下宿

予算では黒字の管に穴があき  
毎日を予算超過の市場籠

陳情へ予算をとって処置します  
手にふれる物冷えびえと秋深む

童宮の夢を見たよな今日のショ  
だれか来そう白桃のうすい皮

オーエスケー川柳会

大坂 形水報

まき子

形水

智女

儀一

あいき

柳安子

凡九郎

雀籠子

鎮彦

牧人

太茂

大輪

十庵

百酒

武助報



こんな世に点す焦点でも探す  
宿命と知りつつ女の性点す  
挫折した野心へ忙し秋の風  
押もつ女としての不伴せ  
唐変木と云われる意味がわからない  
鈍い子は鈍さの良さを見て育て  
選り分けて立派な方を他所へやり  
鯛を釣る野心をエビは知つていず  
ふりむけば父忘れられた妻であり  
めぐり逢いそれから虹がうすれそめ  
旅は良し妻には言えぬ連れが出来  
遠い日の口笛聞かえて来る写真  
鈍い者どうし寄り添い今日も生き  
夢も野心もホールに溢れる仲間たち

川柳ささやま

河原みのる報

凡九郎 万作 晶子 与史 としよ 佳宵 佐知子 里美 柳志 英子 太茂津  
とんぼ 越山 みのる 百合子 とおる 秀峰 茅堂 千代子 素水 孝孝 近江 枝葉 宗珠  
直治 三求 王求 求芽

禪寺の箸の運びにあるリズム  
八ミリに今日はスターの七・五・三  
苔の庭静かに秋の音をよび  
ガラス窓残暑も一縷に拭き落し  
番号で言う街道が親しめず  
ロケの馬今日は討たれる武士を乗せ  
汐のひくのわがわかる黄昏の海が好き  
馬の心へ来て箸立の箸も杉  
馬のこころに切つて立る馬の脚

どんぐり川柳会 谷垣 史好報

妻吹けば鳴らなくなったラッパ鳴る  
朝刊を持って鬼門の戸をひらき  
宿で磨いて父のラッパが冴えてくる  
宿帳に今宵初めて妻と書く  
音もせぬラッパを首相手離さず  
境内で神も見給う新能  
善人の吹くラッパには号令がない  
母は母で小さなラッパいつも持つ  
旧姓で呼び合ひ名簿だけ新姓  
少年の名簿 少女はいつまでも少女  
ラッパ手のママは時々朝寝する  
肩書がとれて名簿もすくくなり  
朝刊の音のさらりと今日も晴  
境内の小鳥は青い風といふ  
境馬燈 人名簿に浮ぶ顔  
境内の裏でうごめく夜の影  
朝刊をみな読んでから便所出る  
年賀状出す時だけの名簿録

川柳たけのら 一行血の色で消され

太陽の音符へ打水乾く音  
倒産の工場につづく彼岸花  
拝み所に行けばこんなに悩む人  
平々凡々この頃しきり歯が疼く

英断 明代 季珠 誠賢 飛鳥 和友 杜客 水客 史好報  
痴亭 天笑 好郎 鬼遊 弥生 美幸 真砂 醉々 凡風 悦風 水修 史郎 万美 好里 静鬼 房水 蘭幸

何思うこの子にじつと見つめられ  
なるまいとした親馬鹿になりそうで  
湯あがりの行くあてもない髪を梳き  
盆どうろふまた速くなる友がある  
ゴルフプロへ今日まで行った事がない  
台風はこわい父ちゃんにいてはしい  
生きものの性やどかりも歩を刻む  
もとの果のくもも一日無駄だった  
白惚れが巢えれば波に流される  
子も孫も帰るお盆を待つて逝き  
正直がいつかは勝つと信じる日  
敬老の日も留守番の老い二人  
せがまれる孫へトンプボがみつからず  
動く子が二人の愛をひとりにじめ  
やせた蚊が病んでる僕へ遠慮せず  
週刊誌の死の間にやら積んで病む  
犯罪の死角港は今日も晴れ

駒つなぎ川柳会 (大阪市) 岸 南柳報

すりかえはいけないことなめましよう  
ビール爆破砲器に替る窓ガラス  
一杯の酒になごんで膝を寄せ  
突然の河内音頭に座が和み  
送別会昨日の敵も和やかに  
かたずいたローンへやつと気が和み  
母の部屋なごむ心になりに来る  
金あれど家は平和と云い切れず  
久し振り逢えは小唄でしめくくり  
妻の座ゆたが夕餉のなごやかさ  
妻が居て子が居て笑いたえぬ家  
あどけない口がぐるりをなごませる

南海電鉄川柳会 (大阪市) 辻 圭水報

時刻表初旅しつかりにぎりしめ  
時刻表黒ばっかしの田舎駅  
貨物列車は省略してる時刻表  
時刻表持たない旅に出る女

笑晴子 文朽光 不み 紫光 愛居 一政 青居 真路 子のばら 英詩 かつ子 淨美 季贊 千百合 弘捨子 石雲 竜雲 茂信 柳一 儀一 規一 規一 南柳報 摩天郎 南柳報 鎮彦 鎮彦 小松園 圭水報 昭月 清水 柳信

駅に来て時刻表には無い臨時  
 敬老の旅へ子が繰る時刻表  
 時刻表又ロカルの数が減り  
 時刻表狂わす旅にひっかかり  
 時刻表の誇り時間がとらわれず  
 乗り換えの五分がという老の旅  
 時刻表のこんな駅でも市を名乗り  
 終発を見届け時刻表も寝る

城北朗句会

川口

長袖シャツ大探しさせ芝生刈る  
 潔癖家チンの抜け毛は迷信にしない  
 地図のない人生だから迷いもし  
 誰が智慧つけたか急に強くなり  
 テリ紙の買溜め癖がついた母  
 ちらり見て一万円の軽さかな  
 熱い茶がせて Tepp の効めなり  
 物価高ばやいて中古みなすてる  
 茶番劇の主役にされたお人好し  
 お茶粥は姑沢庵石は嫁が持ち  
 朝刊の首で日課初まりぬ  
 珍客の来た日商店街休み  
 ちぐはぐな二人の心へ月が冴え  
 青い目の方が膝くずさぬ点茶席  
 いつ来ても地下街の道迷う道  
 智恵のない顔も集める前後策  
 大人達チビッコ広場を追い出され  
 仏前に酒、気安めと知りながら  
 中国展、展示品より人をみる

弘生報 保圭綾 鎮宏 摩季 肖儀  
 水女彦子 彦子 彦子 彦子 彦子  
 夫 女 彦 彦 彦 彦  
 雪 蒼 蒼 蒼 蒼 蒼  
 女 蛇 蛇 蛇 蛇 蛇

いとおしや親の頑固で嫁きおくれ  
 信念を頑固と言われ時を待つ  
 かたくなに言い張る心の隅で託び  
 頑固さを子に叱られる番となり  
 親に似て頑固者だと言う世間  
 才あれど頑固一途が玉にきず  
 総会へ頑固とび出しまたまらず  
 かたくなな二人を覗く窓の月  
 納得はしたが片意地妥協せず  
 片意地を張って物事ぶちこわし  
 嫌われる俺の頑固も親ゆすり  
 頑固だが取り得は一つ正直さ  
 謝まって居るに頑固が語め寄せる  
 頑固にも程があるよと母は笑み  
 頑固者養老院でも村八分

▼10月3日文化祭の佳き日に、川柳東大阪の  
 会長、竹中肖二氏は「東大阪市民文化掲揚に  
 関する功績大なる」により、東大阪市民文化連  
 盟から表彰されました。  
 川柳東大阪 竹中 肖二報

小 雪 細 民 公 女 三 石 一 葉 磯 雄 風 影 埃 影 埃 影 埃  
 河 舟 暁 舟 椰 子 郎 椰 子 郎 椰 子 郎 椰 子 郎  
 古 方 古 方 古 方 古 方 古 方 古 方 古 方 古 方  
 座 郎 座 郎 座 郎 座 郎 座 郎 座 郎 座 郎 座 郎  
 鬼 遊 鬼 遊 鬼 遊 鬼 遊 鬼 遊 鬼 遊 鬼 遊 鬼 遊  
 雀 踊 雀 踊 雀 踊 雀 踊 雀 踊 雀 踊 雀 踊 雀 踊  
 天 笑 天 笑 天 笑 天 笑 天 笑 天 笑 天 笑 天 笑  
 喜 風 喜 風 喜 風 喜 風 喜 風 喜 風 喜 風 喜 風  
 吸 江 吸 江 吸 江 吸 江 吸 江 吸 江 吸 江 吸 江  
 柳 志 柳 志 柳 志 柳 志 柳 志 柳 志 柳 志 柳 志  
 牧 郎 牧 郎 牧 郎 牧 郎 牧 郎 牧 郎 牧 郎 牧 郎  
 悦 郎 悦 郎 悦 郎 悦 郎 悦 郎 悦 郎 悦 郎 悦 郎  
 醉 郎 醉 郎 醉 郎 醉 郎 醉 郎 醉 郎 醉 郎 醉 郎  
 文 秋 文 秋 文 秋 文 秋 文 秋 文 秋 文 秋

祭礼に寄れとは目的のある女  
 オロロンの火祭アイスの血を炎やす  
 背が低いからおみこは遠慮する  
 一声の暗示へ生きる灯をともす  
 真直ぐに走って風の声を聞く  
 花言葉読めば少女の声になり  
 大連で話す善人もかも知れぬ  
 未練たらしむ元代議士の名の花輪  
 陸奥哀しむつ又かなし名をあげて  
 猫の名へ孤独は一つ小さくわれる  
 ビエロ逝く小さな石にすくわれる  
 生かされた生ける感謝の灯をともし  
 感謝する陰に傷つく人が出来  
 暴君でいて革新を口にする  
 時事放談さて革新も気に入らず  
 さわやかな風売ってない土地を吹き

鶴 声 君 子 弘 生 君 子 弘 生 君 子 弘 生  
 久 生 久 生 久 生 久 生 久 生 久 生 久 生 久 生  
 二 子 二 子 二 子 二 子 二 子 二 子 二 子 二 子  
 花 子 花 子 花 子 花 子 花 子 花 子 花 子 花 子  
 止 庵 止 庵 止 庵 止 庵 止 庵 止 庵 止 庵 止 庵  
 好 郎 好 郎 好 郎 好 郎 好 郎 好 郎 好 郎 好 郎 好 郎  
 薰 風 薰 風 薰 風 薰 風 薰 風 薰 風 薰 風  
 宏 子 宏 子 宏 子 宏 子 宏 子 宏 子 宏 子 宏 子 宏 子  
 静 幸 静 幸 静 幸 静 幸 静 幸 静 幸 静 幸 静 幸  
 美 歩 美 歩 美 歩 美 歩 美 歩 美 歩 美 歩 美 歩 美 歩  
 小 松 園 小 松 園 小 松 園 小 松 園 小 松 園 小 松 園 小 松 園 小 松 園  
 あい 船  
 一 舟 一 舟 一 舟 一 舟 一 舟 一 舟 一 舟 一 舟 一 舟

大阪文化祭川柳賞作品(有信新之助報)  
 一―二名の出席でした。川柳塔の月例  
 句会でも平均七〇名なのはどうしたこと  
 か?  
 席 題  
 ふり出しに帰る屋台を妻が押す 羽原静歩  
 一せんめし屋の花を哲学だと思ふ 定金冬二  
 ビスケット半分呉れる孫を抱く 堀江くに子  
 値上げして値上げをされて考える 池口雅己  
 兼 題  
 勤労の答えが膳をなごませる 海士天樹  
 生駒山鉄砲節がこだまする 安田吉甫  
 眼られた鉢で必死に生きる菊 山本慶三  
 認定を待つ間も進む公害病 有信新之助  
 喜びも悲しみもリボン色で分け 藤本俊雄  
 天へ続いて樹は一本の意志となる 幻四郎

# 本社十二月句会

日時 十二月七日(土) 午後六時  
会場 大阪府中小企業文化会館(五階五二号室)

天王寺区上汐町五丁目二番地・地下鉄谷町  
九丁目下車南三百米・電話七七一一四〇九六

(今月の出題・現島子昌志)

兼題

柳 話 菊 沢 小 松 園  
混 線 岩 本 雀 踊 人 選  
崩れる 小 浜 牧 人 選

追 伸 西 い わ を 選  
見 学 大 坂 形 水 選

席題 三題 当日発表  
会費 三百円

各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
大阪市南区鰻谷中之町20

川 柳 塔 社

1月の兼題 賀始 祝発 誂祭 ねるり

## 緊急常任理事会

10月24日、50年度へ飛躍  
を合言葉に緊急常任理事  
会が開かれた。

まず多久志副理事長を議長にして運営編集両面にわたって協議した。運営面は別項のとおり慎重人選。編集部も増員して強化をはかるなど、すべてに意欲的な発言が目立った。同人諸氏にも本誌はさみ込みで協

力をねがうことにし、文字通り同人一体となって来年度へ望むことになった。(ご協力のほど、お願いいたします。)

出席―若本多久志・西尾 栗・大坂形水・阿万方的・金井文秋・野村太茂津・戸田古方・西いわを・本多柳志・傍島静馬・島居百酒・菊沢小松園・橋高薫風・川村好郎・不二田一三夫諸氏。

# 募 集

## 二月号発表表(12月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選  
水煙抄(10句) 川村好郎 選  
課題吟(各題5句以内)

「藪」 竹内翁 童 選  
「雄弁」 山内静水 選  
「雪景色」 尼 緑之助 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

## 三月号発表表(1月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選  
水煙抄(10句) 川村好郎 選  
課題吟(各題5句以内)

「勸誘」 藤村メ 女 選  
「ネジ」 西出一栄 選  
「帯」 高橋操子 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
★用紙はなるべく柳葉をご使用ください。

原稿締切にご協力を

定価三百円(送料十六円)

半年分 千八百五十円(送料共)  
一年分 三千六百円(送料共)

昭和四十九年十一月二十五日印刷  
昭和四十九年十二月一日発行

大阪府南区鰻谷中之町二〇番地

編集人 中島蓬太郎

発行人 藤原童心社

郵便番号 5442

大阪府南区鰻谷中之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一一三九八五番  
郵便口座 大阪・三三三八八番

・ペンペン草・

「最近の川柳・俳句誌集から「原爆呪詛の句数々」——(朝日新聞49年10月23日)夕刊から「前略……「川柳塔」(八月号・大阪市)でも、特集「原爆許すまじ」の企画があった。——広島島の思い出を高橋鬼焼が、長崎の思い出を原田明春が書き「不二田一三夫が「標語から見た原水爆反対」を書いている。」

それらの文中に、「親の血が浸む浦上の土に触れ——巨樹」

お役だてください

**アリナミンA**  タケダ

効能—肉体的疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB<sub>1</sub>補給。脚気。神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和。

☆食後すぐおのみください。☆25ミリ錠。

「ケロイドに思春期もなし  
車椅子——蜂鼠」  
★キノコ雲神を忘れた形で  
立ち——一三夫」

など原爆呪詛(じゅそ)の句の数々がある。またそれにまじって、

「原爆は知らずも平和願う日々——忠男」など、被爆を知らぬ世代の作品がある。原爆の恐怖をまのあたり知っている人が、唯一の被爆国日本にさえ次第に減っているのである。後略……(後藤比奈夫)

★この朝日新聞の反響は大きかった。これが本年度の収獲であったようだ。

★くる年ゆく年。本年はいんな事があった。十周年記念川柳大会、同人句集刊

▼葉子コーナー

▼不二田様はじめ皆様ののおかげで川柳塔賞をいただき、そのうえ各地から祝電やカードを賜わり、川柳をしてよかったなど今さらながら身に沁みましました。お礼状もまだ差し上げていませんがお許しくださいませ。古枯しに飛ばされそうな私ですがより勉強いたします。

行等々。ぼくにとっても思い出多い年になりそうだ。

★ミスタージャイアンツ、長島茂雄選手が17年間の選手生活からさよならした。見事な引ききわだと思つた。川柳瓦版——11月号の表紙は彼の泣いている写真だった。新聞や週刊誌で見たものより、それが誌誌であっただけに印象が深かった。

★ぼくはタイガースの藤村富美男選手が好きだった。大正中学、呉港中学時代から彼のファンで、タイガースの結成当時、その初陣披露が昭和11年4月19日に甲子園球場で東京セネタースと名古屋金鯱軍を迎えての試合があった。この第二試合に呉港中学からプロ入りした藤村富美男少年がマウンドをふみ、大学出をあの豪球でバツバツと三振に打ちとつたものである。

★プロ野球に興味を持つようになったのは、それより二年前、つまり昭和9年11月に日米対抗大野球試合とメイ打って、甲子園球場へベイブ・ルースやルー・ゲーリッグ、ジミー・フオックスなど全米オールスター軍の来日からだ。今年

たのしさひろがる お買物



**阪急**

大阪梅田本店  
千里阪急  
神戸三宮支店  
東京大井町  
京都錦町支店  
京都三条支店  
白土アンセルス阪急

のメツクなどとは問題にならない強力メンバーだった。当時のぼくのスコアブックを見るとベイブ・ルースはその日3四死球と左翼越二塁打一本となっているが、日本の投手がビビって投げられなかったから彼の本塁打は見られずじまい。金田正一投手の全盛期ならよもや逃げのピッチングはしなかったらうとおもう。

★ぼくの若い頃、ケンカ好きの連中を集めてチームをつくり、草野球の優勝戦までいったことがある。ぼく自身キャッチ・ボールもできないくせに監督だった。そのかわり野球評論家飛田

穂洲著の「投手篇」や「守備篇」から「攻撃篇」まで暗記するほど読んだものがある。東大阪では相手が強かった。野球が強いのではなく、負けるのとケンカで勝つからだった。

★当分はプロ野球ともお別れである。メツクと巨・南連合戦の入場券を貰いながら本号の編集中で行けなかつた。

★あと7行で本年号もおわり。来年は気鋭の編集部員の参加で活気づけよう。乞うご期待である。

★よい年をお迎えくださるよう祈ります。

(不二田一三夫)

製造・販売 サントリー株式会社

(サントリー謹製)

上等の夜を約束する  
上等のワイン。



金曜日はワインを買う日。



サントリーシャトーオーリオン

◀赤・白>1,500円 ●中瓶800円

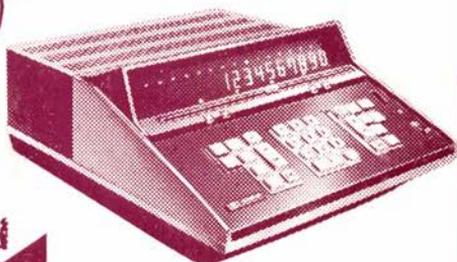
昭和四十九年十一月二十五日  
創刊大正十三年通巻五七一号  
第三種郵便物認可  
発行毎月一日発行

川柳塔

十二月号



タッチでえらべば  
やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム  
SACOM

見やすい設計 ICC-162型 280,000円  
平面表示ゼロサブレス・√%キー付き  
16ケタ2メモリー高級品

SANYO 三洋電機株式会社

定価 三百円 (送料十六円)